

最近に於ける我が國死亡率の

若干の傾向 (豫報) (二)

館 上 窪
 稔 正 田
 夫 嘉 彰

目次

- 一 序
- 二 男子特殊死亡率 (以上前號掲載)
- 三 女子特殊死亡率

附 男女特殊死亡率比較

- (一) 總數 (一) 零歳死亡率 (二) 乳兒死亡率 (三) 一歳死亡率 (四) 二歳死亡率 (五) 三歳死亡率 (六) 四歳死亡率 (七) 五—九歳死亡率 (八) 一〇—一四歳死亡率 (九) 一五—一九歳死亡率 (一〇) 二〇—二四歳死亡率 (一一) 二五—二九歳死亡率 (一二) 三〇—三四歳死亡率 (一三) 三五—三九歳死亡率 (一四) 四〇—四九歳死亡率 (一五) 五〇—五九歳死亡率 (一六) 六〇歳以上死亡率 (以上本號掲載)

三 女子特殊死亡率

附 男女特殊死亡率比較

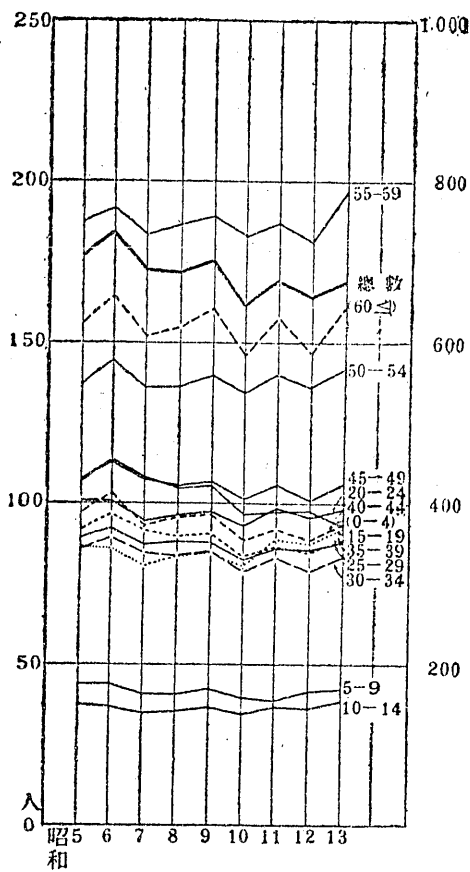
最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (二)

(1) 女子死亡率總數が男子のそれに比して常に低位に在ることは周知の通りである(第一表参照)。

(2) 第一表、第二表、第一九圖及第二〇圖の如く、特殊死亡率の全面に互つて相當顯著なる一上一下を繰り返してゐるが、總數に於ては全期間を通じて傾向として輕微なる下降を認めることが出来る。而して昭和六年(滿洲事變)を最高として昭和一〇年に至る迄、しかく顯著ではないが下降の傾向を認めることが出来る。昭和一〇年を轉期として昭和一〇年から昭和一三年に至る間に於ては最早低下の傾向を認め難いのであつて、輕微なる上昇、少くとも停頓状態と見なければならぬこと男子について記述したるところと殆んど同様である(第一圖及第二圖比較参照)。

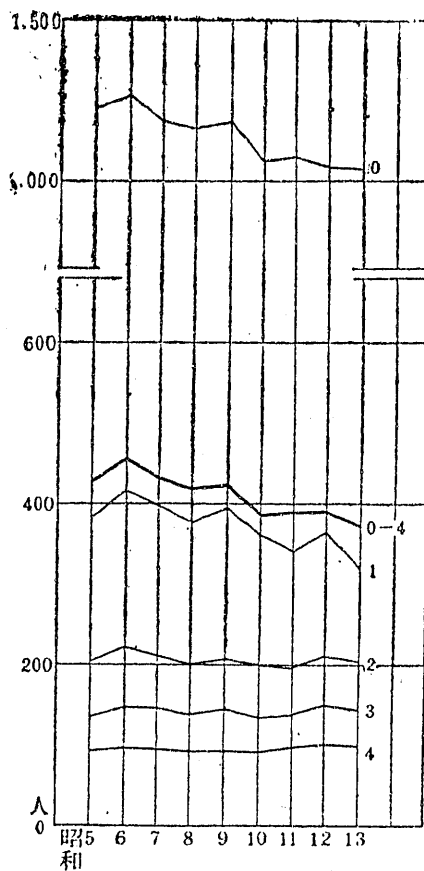
第一九圖 女五歳階級別死亡率の變動

(各年階級人口一〇、〇〇〇に付)



第二〇圖 女零歳及四歳以下幼兒死亡率の變動

(各歳人口一〇、〇〇〇に付)



(3) 後期に於て年齢別死亡率中特色ある傾向を示せるものを挙げれば次の如くである(第一表、第二表、第二九圖及第二〇圖参照)。

(イ) 男子死亡率と同様、零歳及一歳死亡率のみが低下を示し、爾餘の年齢階級に於ては何れも多少とも上昇の傾向を認めることが出来る。

(ロ) 特に上昇傾向の顯著なるものは、男子と同様、一五—一九歳であるが、以下女子に於ては一〇—一四歳、五—九歳、四歳及三歳の順位を以て上昇傾向が明かである。

(ハ) 二〇—二四歳、二五—二九歳及三〇—三四歳の壯年人口の死亡率の傾向は前期を通じて男子よりも女子に於て稍、低下の傾向著しきものがあつたが、後期に至つては男子と略、同様の停頓的傾向を示してゐる。

(ニ) 支那事變發生の昭和一二年から同一三年にかけて總數に於て稍、上昇を示してゐるが、此の間に於ける増加の特に顯著なる年齢階級は

四〇歳以上であつて、高次年齢に至る程上昇の度を加へてゐること男子と同様である。

(ホ) 後期に於ける死亡率總數の上昇傾向は比較的緩慢であるが、それには零歳及一歳の死亡率の低下が、爾餘の年齢階級に於ける上昇の傾向を打消してゐること之亦男子と同様である。

(4) 昭和一〇年の事實に就いて見るに、女總數の主要死因は、第三六表の通り、「呼吸器の結核」及「其の他の結核」を併せて一一%を超え第一位に上り、「腦出血、腦栓塞及腦血栓」が第二位を占めて九%を超えてゐる。以下「肺炎」及「老衰」夫々九%、「下痢及腸炎(二歳未満)」、「先天性弱質(一歳未満)」、「腎臟炎」及「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」夫々五%、「瘧、其の他の悪性腫瘍」及「其の他の消化器の疾患」夫々四%、「腦膜炎(結核性を除く)」及「不明の診断及不詳の原因」夫々三%といふ状態である。

今之を男子の主要死因と比較すれば(第三七表参照)、女子に於て特に「老衰」の割合多く、「先天性弱質」の地位が稍、低く、女子に於ては「不慮の傷害」が主要死因中に加はつて來ないのが特色である。爾餘の死因については概ね男子と同様である。

(5) 今、主要死因別死亡率を見れば(第三七表及第二二圖参照)。

(イ) 「結核」は男子に比し常に稍、低位を保つてゐるが、傾向は上昇。

(ロ) 「腦出血、腦栓塞及腦血栓」は男子に比し常に明かに低位を保ち、

傾向は男子と略、同様に顯著なる上昇。

(ハ) 「肺炎」は之亦男子に比し常に明かに低位を保ち、傾向は上昇。

(ニ) 「老衰」は男子に比し常に著しく高位を保ち、傾向は最も顯著なる

第三六表 女總數主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合
	昭和一〇年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	
總 數	五五八、三三七	五九二、四三三	五八三、七四四	六〇六、六九九	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
主 要 死 因	四〇四、六一一	四三三、五三三	四三三、六六六	四四三、五七七	七三、〇〇〇	七三、〇〇〇
一 一 及 二 二 結 核	六四、九三三	七二、六五五	七二、五八〇	七三、四四四	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 の 結 核 及 淋 巴 腺 を 含 む)	四四、五五九	五〇、三三九	四九、三三三	五〇、一五五	八、二六六	八、二六六
一 二 其 の 他 の 結 核	一九、三五四	二二、三三六	三三、二〇七	二三、二九二	三、七三四	三、七三四
三 三 腦 出 血、腦 栓 塞 及 腦 血 栓	五二、五七一	五三、八三九	五三、六四四	五三、八〇〇	九、三三三	八、九二二
四 八 肺 炎	四八、四〇二	五三、一七四	五〇、一九〇	五〇、一七〇	八、六七七	八、八二二
七 八 老 衰	四七、一九四	五〇、七四四	五〇、七四四	五八、六六六	八、四四四	九、二二二
五 二 下 痢 及 腸 炎 (二 歳 未 滿)	三〇、〇九六	三三、九七三	三三、二九五	二七、六六八	五、三三三	五、三三三
七 四 先 天 性 弱 質 (一 歳 未 滿)	二九、四二五	三〇、八七一	二六、六五八	二七、五五五	五、〇〇〇	五、〇〇〇
五 九 腎 臟 炎	二六、五三三	二九、六六一	二六、八三三	三二、三三七	五、一一一	五、〇〇〇
五 三 下 痢、腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歳 以 上)	三六、五三三	二八、一三四	二九、五三三	三三、八五五	四、七三三	四、七三三
一 八 癌、其 の 他 の 惡 性 腫 瘍	二四、三七七	二四、三七八	二四、八三三	二四、九四四	四、三三三	四、二二二
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	一九、八四〇	二〇、五九七	二〇、七〇七	二二、五五五	三、三三三	三、四四四
三 〇 腦 膜 炎 (結 核 性 を 除 く)	一七、九四四	一七、六四三	一七、三三三	一五、五九九	三、三三三	二、九九九
八 五 不 明 の 診 斷 及 不 詳 の 原 因	一五、九四六	一七、八六五	一五、四七一	一七、九二二	二、六六六	三、〇〇〇
其 の 他	一五、八〇六	一五、八八八	一五、五八八	一五、二九三	二、七三三	二、六六六

上昇。
 (ホ) 「下痢及腸炎(二歳未満)」は男子に比し常に明かに低位を保ち、傾向は低下。
 傾向は低下。

(ハ) 「先天性弱質」は男子に比し常に著しく低位を保ち、傾向は明瞭なる低下。
 (ト) 「腎臓炎」は男子に比し常に高位を保ち、傾向は微弱なる上昇。
 最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (二)

(チ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子に比し常に高位を保ち、傾向は著しき上昇。
 傾向は著しき上昇。

(リ) 「癌、其の他の悪性腫瘍」は男子に比し常に極めて僅かに低位を保ち、傾向は「不変」。
 (ヌ) 「其の他の消化器疾患」は男子に比し常に極めて僅かに高位を保ち、傾向は男子とは反對に軽度の上昇。

第三七表 女總數主要死因別死亡率

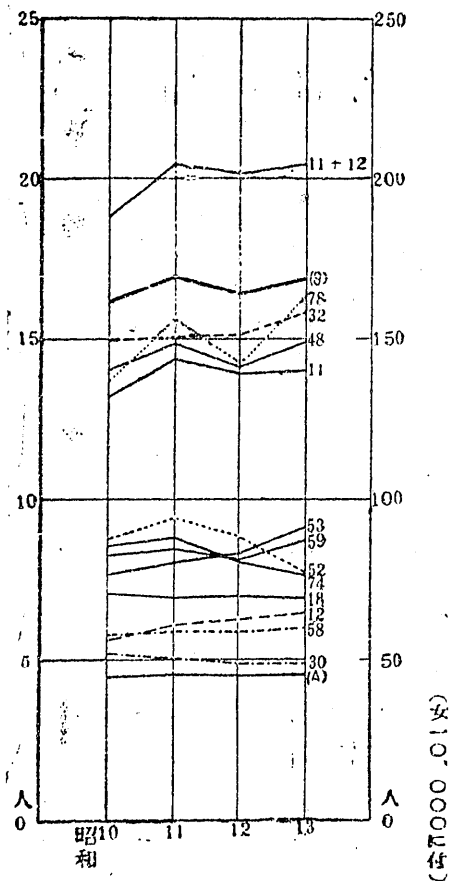
死 因	昭和三年 (女10,000付)			
	昭和二年	昭和二年	昭和三年	昭和三年
總 數	二六・七三	二六・三三	二六・〇三	二六・九一
主 要 死 因	二七・二〇	二七・七六	二七・〇七	二七・四六
一 一 及 一 二 結 核	一八・八〇	二〇・四六	二〇・二六	二〇・四五
一 一 呼 吸 器 の 結 核	一三・二〇	一四・七七	一三・九一	一四・〇〇
一 二 其 の 他 の 結 核	五・六一	六・〇九	六・二六	六・四五
三 二 腦 出 血 腦 栓 塞 及 腦 血 栓	一四・九四	一五・〇八	一五・三三	一五・八三
四 八 肺 炎	一四・〇三	一四・八九	一四・三三	一四・九五
七 八 老 衰	一三・七六	一五・六三	一四・三三	一六・三三
五 二 下 痢 及 腸 潰 瘍 (二 歲 未 滿)	八・七三	九・四一	八・八二	七・七二
七 四 先 天 性 弱 質	八・三三	八・八一	八・〇七	七・六六
五 九 腎 臟 炎	八・三六	八・四七	八・二四	八・七二
五 三 下 痢 腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歲 以 上)	七・六五	八・〇三	八・三三	九・一四
一 八 癩 其 の 他 の 惡 性 腫 瘍	七・〇六	六・九六	七・〇〇	六・九四
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	五・七五	五・八八	五・八三	六・〇〇
三 〇 腦 膜 炎 (結 核 性 を 除 く)	五・一九	五・〇四	四・八八	四・九〇
八 五 不 明 の 診 斷 及 不 詳 の 原 因	四・六三	五・二〇	四・三六	四・八四
其 の 他	四・五五	四・五五	四・九六	四・四五

(ル) 「腦膜炎(結核性を除く)」は男子に比し常に低位を保ち、傾向は輕微なる低下。

(ヲ) 「不明の診断及不詳の原因」は男子に比し常に稍、低位を保ち、傾向は殆んど「不變」。

(ワ) 此の間に於ける死亡率上昇の傾向に積極的作用を及ぼしてゐるものは「腦出血、腦栓塞及腦血栓」「老衰」「結核」及「下痢、腸炎及腸

第二二圖 女總數主要死因の變動



一十一 結核
 一十二 結核
 一三 呼吸器の結核(気管及気管支の淋菌腫を含む)
 一四 其の他の結核
 一五 腦出血、腦栓塞及腦血栓
 一六 肺炎
 一七 老衰
 一八 下痢及腸炎(二歳未満)
 一九 先天性弱質(二歳未満)
 二〇 腎臓炎
 二一 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)
 二二 癩、其の他の悪性腫瘍
 二三 其の他の消化器の疾患
 二四 腦膜炎(結核性を除く)
 二五 不明の診断及不詳の原因
 二六 其の他
 括弧を附せるは右側の目盛に據る

潰瘍(二歳以上)」の上昇であつて、此等は「先天性弱質」及「下痢及腸炎(二歳未満)」の著しき低下を相殺して尙且餘りあるものと云はねばならぬ。

二 零歳死亡率(「乳兒死亡率」)

(1) 女子の零歳死亡率は男子のそれに比し、各年次に亘つて低い(第一表参照)。

(2) 男子死亡率と同様、前期を通じて他の年齢階級に比し零歳死亡率の低下が最も顯著である。

(3) 男子死亡率と同様、後期に於て明瞭なる低下の傾向を示してゐるものは零歳死亡率のみである。但し其の程度は男子に比し稍著しきが如

第三八表 女零歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三		
總 數	106,768	111,856	108,111	100,288	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	75,113	79,092	77,116	71,455	70.35	70.62	67.51	71.31		
七四 先天性弱質(一歳未満)	29,455	30,872	26,656	27,554	27.55	27.70	27.36	27.45		
四八 肺 炎	18,568	18,701	18,700	18,955	17.85	16.76	17.68	18.90		
五二 下痢及腸炎(二歳未満)	16,406	20,499	18,450	17,255	15.37	18.35	17.05	17.20		
七七 其他の幼若乳兒固有の疾患(三箇月未満)	4,488	4,736	4,246	4,055	4.16	4.24	3.94	4.05		
三〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	4,333	4,195	3,965	3,630	4.06	3.85	3.67	3.63		
其 の 他	31,856	33,504	30,965	26,873	29.65	29.94	28.49	26.79		

る(第三八表及第六表比較参照)。

(6) 主要死因別死亡率を見れば(第三九表、第二二圖、第七表及第四圖比較参照)、各種死亡率ともに男子のそれに比し明かに低率であるが、傾向は殆んど男子と同様である。即ち、

(イ) 「先天性弱質(一歳未満)」の死亡率は零歳死亡率總數の傾向と類似はしてゐるが變動の幅は極めて狭少であり、低下の速度も極めて微弱

第三九表 女零歳主要死因別死亡率

(零歳女10,000に付)

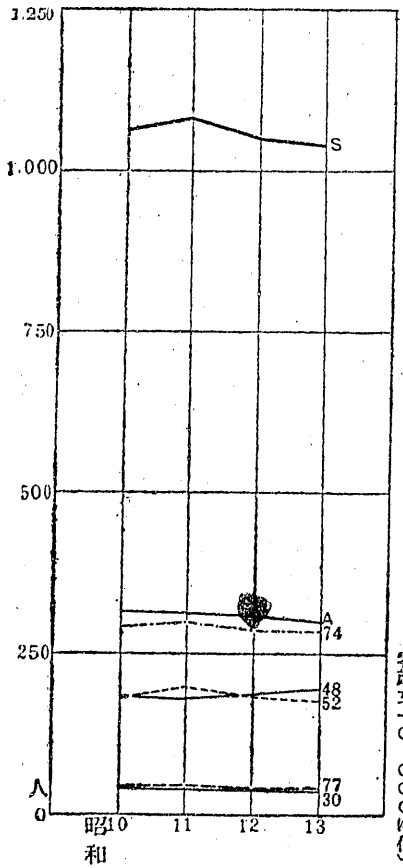
死 因	昭和一〇年					昭和一一年					昭和一二					昭和一三				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三				
總 數	106.768	111.856	108.111	100.288	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00				
主 要 死 因	75.113	79.092	77.116	71.455	70.35	70.62	67.51	71.31	70.35	70.62	67.51	71.31	70.35	70.62	67.51	71.31				
七四 先天性弱質(一歳未満)	29.455	30.872	26.656	27.554	27.55	27.70	27.36	27.45	27.55	27.70	27.36	27.45	27.55	27.70	27.36	27.45				
四八 肺 炎	18.568	18.701	18.700	18.955	17.85	16.76	17.68	18.90	17.85	16.76	17.68	18.90	17.85	16.76	17.68	18.90				
五二 下痢及腸炎(二歳未満)	16.406	20.499	18.450	17.255	15.37	18.35	17.05	17.20	15.37	18.35	17.05	17.20	15.37	18.35	17.05	17.20				
七七 其他の幼若乳兒固有の疾患(三箇月未満)	4.488	4.736	4.246	4.055	4.16	4.24	3.94	4.05	4.16	4.24	3.94	4.05	4.16	4.24	3.94	4.05				
三〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	4.333	4.195	3.965	3.630	4.06	3.85	3.67	3.63	4.06	3.85	3.67	3.63	4.06	3.85	3.67	3.63				
其 の 他	31.856	33.504	30.965	26.873	29.65	29.94	28.49	26.79	29.65	29.94	28.49	26.79	29.65	29.94	28.49	26.79				

くである。

(4) 後期に於ては零歳死亡率低下の速度は著しく緩慢になつてゐる。

(5) 主要死因を見るに、乳兒死亡の二七・六%の多きを占めるものは先天性弱質(一歳未満)であつて第一位を占め、「肺炎」が一七・三%にして第二位、「下痢及腸炎(二歳未満)」亦一七・三%で第三位を占め、以上三者を以て乳兒死亡の六二%を超え殆んど全く男子死亡率と同様であ

第二二圖 女零歳主要死因別死亡率の變動



零歳女10,000に付

(ハ) 「下痢及腸炎(二歳未満)」は零歳死亡率總數と殆んど同様の變動をみせてゐる。

(ニ) 「其の他の幼若乳兒固有の疾患(三箇月未満)」及「腦膜炎」は殆んど「不變」。

三 一歳死亡率

(1) 此の年齢に於ても女子の死亡率は男子に比し各年次に互つて低い(第一表参照)。

(2) 前期後期を通じて軽度の低下傾向を認めることが出来る。後期に於ける低下は不安定ではあるが、男子に比し稍々著しきかの如くである(第一表参照)。

(3) 主要死因の第一位を占めるものは「下痢及腸炎(二歳未満)」であつて三五%の多きに達し、「肺炎」之に亞いで二四%を示し、「下痢及腸炎」と共に一歳死亡の二大死因をなすこと殆んど全く男子と同様である。

であつて寧ろ「不變」に近き状態である。

(ロ) 「肺炎」死亡率のみは明かに上昇。

第四〇表 女一歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	三三,九四三	三三,九三三	三三,二二六	三三,九八七	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	三三,九三三	三三,九三三	三三,七五五	三三,九八七	100.00	100.00	100.00	100.00		
五二 下痢及腸炎(二歳未満)	二二,二六八	二二,四七三	二二,八八六	二二,四四五	七三.03	七三.00	七三.33	七三.07		
四八 肺 炎	八,〇五七	七,四七九	八,五〇六	七,六六八	二四.02	二二.43	二五.23	二二.67		
三〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	二,〇〇五	二,一三五	二,二七〇	一,九六一	六.99	六.66	六.96	六.66		
四 脈 疹	一,八八六	九〇六	二,100	八〇〇	五.72	二.84	五.99	二.88		
其 の 他	九,〇10	八,九三六	九,四10	八,九四三	二七.66	二六.00	二七.77	二九.43		

(第四〇表及第八表参照)。

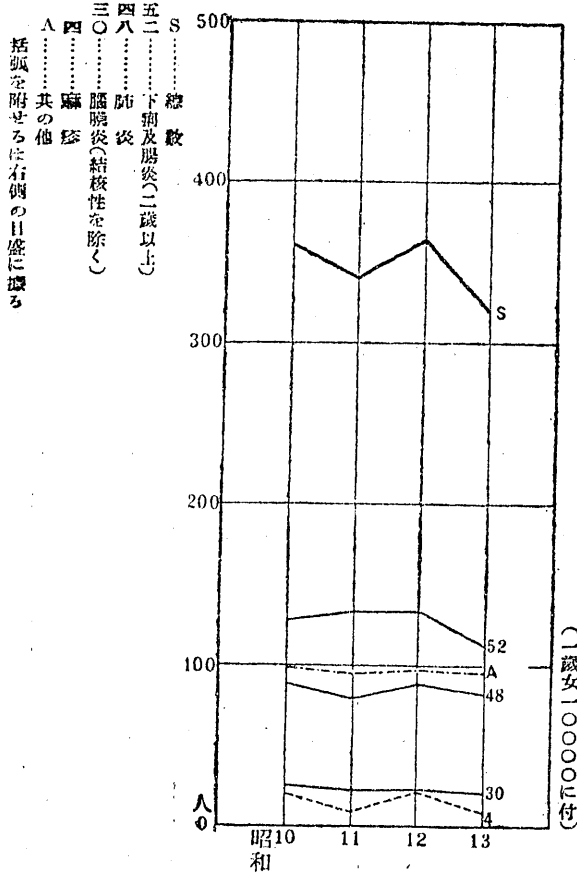
(4) 主要死因別死亡率を見るに(第四一表、第二三圖、第九表及第五圖参照)。

第四一表 女一歳主要死因別死亡率

死 因	昭和二年	昭和二年	昭和三年	昭和三年
總 數	三〇・七	三〇・七	三〇・五	三〇・五
主 要 死 因	二六・九	二四・三	二六・九	二六・七
五二 下痢及腸炎(二歳未満)	二七・六	一三・〇	一三・二	一一・七
四八 肺 炎	八・三	七・九	八・三	八・〇
三〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	二五・三	三三・七	二三・六	二〇・六
四 麻 疹	三〇・三	九・六	三・〇	九・〇
其 他	九・六	九・六	九・六	九・六

(一歳女10,000に付)

第二三圖 女一歳主要死因死亡率の變動



「麻疹」の死亡率が女子に於ては男子に比し稍、高いのを除外すれば爾餘

最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (一)

の各種死亡率は何れも男子に比し若干低い。然し傾向は何れも殆んど全く男子と同様である。即ち、

(イ) 「下痢及腸炎(二歳未満)」は昭和一〇年から同一二年迄僅かに上昇してゐるが同一三年に至つて相當顯著に低下を示してゐる。

(ロ) 「肺炎」は殆んど「不變」乃至は微かに上昇。

(ハ) 「脳膜炎(結核性を除く)」は輕微な低下。

(ニ) 「麻疹」は明瞭な隔年性を示してゐるが傾向としては微細なる低下。

四 二歳死亡率

(1) 此の年齢に於ても女子の死亡率は男子に比し各年次に互つて低い。

但し、男女死亡率の懸隔は零歳及一歳に比し遙かに接近を示してゐる(第一表参照)。

(2) 前期に於ては輕度なる低下が認められるが、後期に於ては稍、上昇の傾向を見出すことが出来る。此等の傾向は男子と殆んど同様である(第一表参照)。

(3) 主要死因の第一位は「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」であつて二一%に達し、第二位の「肺炎」は一七%、「赤痢及疫痢」及「脳膜炎(結核性を除く)」が之に亞ぎ夫々一〇%を稍、超えてゐる。以上の死因の割合は男子に比し何れも稍、大であるが、「不慮の傷害」は男子に比し稍、低(第四二表及第一〇表参照)。

(4) 主要死因別死亡率を見るに(第四三表、第二四圖、第一一表及第六圖参照)、「肺炎」の死亡率が男子に比し稍、高いのを除けば爾餘の死因別死

第四二表 女二歳主要死因別死亡

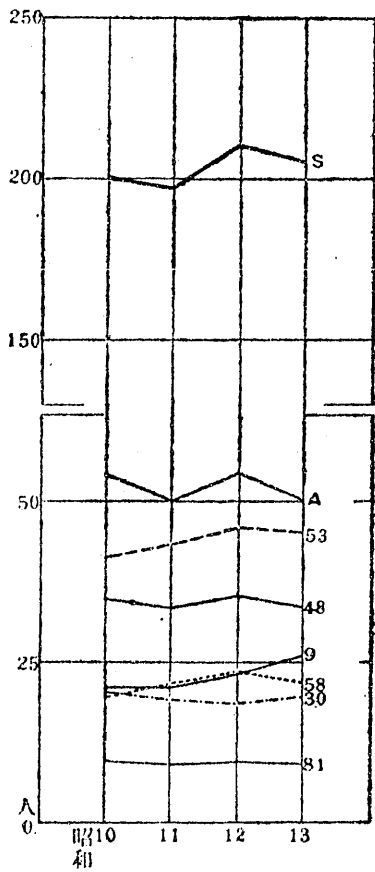
死	因	實					割	合
		昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二	昭和一三年	昭和一〇年		
總	數	二八,三六六	一七,四六六	一九,一三三	一九,三三三	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇
主	要	一三,四四四	一五,〇六六	一四,一七六	一四,三三三	七三.〇一	七四.七三	七三.〇一
五三	下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	三,七六九	三,八三三	四,一七九	四,二三三	一〇.六二	一〇.六二	一〇.六二
四八	肺 炎	三,一七二	二,六九二	三,三三三	三,一三三	一七.三三	一六.九二	一六.三三
九	赤 痢 及 疫 痢	一,〇六六	一,八六一	二,〇六六	二,四三三	一〇.四三	一〇.四三	一〇.四三
三〇	腦 膜 炎(結核性を除く)	一,八五五	一,六九二	一,六八八	一,八三三	六.六六	六.六六	六.六六
五八	其の他の消化器の疾患	一,七七一	一,九二二	二,一三七	二,〇三三	九.七三	一〇.九二	一〇.五九
八一	不慮の傷害	八四四	八〇九	八六一	八五三	四.七三	四.六二	四.四三
其	の 他	四,九四四	四,四三〇	四,九五九	四,七〇一	二六.九二	二五.二二	二四.四三

第四三表 女二歳主要死因別死亡率

死	因	昭和二〇年			昭和二一年			昭和二二年			昭和二三年		
		數	率	割合	數	率	割合	數	率	割合	數	率	割合
總	數	一九,九二二	一七.〇〇	一〇〇.〇〇	二〇,九二二	一五.五五	一〇〇.〇〇	二〇,五三三	一五.一五	一〇〇.〇〇	二〇,三三三	一五.〇〇	一〇〇.〇〇
主	要	一五,〇六六	一四.七三	一〇〇.〇〇	一五,五三三	一四.八五	一〇〇.〇〇	一五,一三三	一四.五二	一〇〇.〇〇	一五,〇三三	一四.四三	一〇〇.〇〇
五三	下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	四,三三三	四.三三	一〇〇.〇〇	四,五三三	四.二二	一〇〇.〇〇	四,八三三	四.二二	一〇〇.〇〇	四,九三三	四.二二	一〇〇.〇〇
四八	肺 炎	三,六六六	三.六六	一〇〇.〇〇	三,三三三	三.二二	一〇〇.〇〇	三,五三三	三.二二	一〇〇.〇〇	三,四三三	三.二二	一〇〇.〇〇
九	赤 痢 及 疫 痢	二,〇八三	二.〇八	一〇〇.〇〇	二,二三三	二.一三	一〇〇.〇〇	二,三三三	二.一三	一〇〇.〇〇	二,四三三	二.一三	一〇〇.〇〇
三〇	腦 膜 炎(結核性を除く)	二,〇三三	二.〇三	一〇〇.〇〇	一,九三三	一.九三	一〇〇.〇〇	二,〇三三	一.九三	一〇〇.〇〇	二,一三三	一.九三	一〇〇.〇〇
五八	其の他の消化器の疾患	一,九二二	一.九二	一〇〇.〇〇	二,〇三三	二.〇三	一〇〇.〇〇	二,一三七	二.〇三	一〇〇.〇〇	二,二三三	二.〇三	一〇〇.〇〇
八一	不慮の傷害	九二二	九.二二	一〇〇.〇〇	九三三	九.三三	一〇〇.〇〇	九三三	九.三三	一〇〇.〇〇	九三三	九.三三	一〇〇.〇〇
其	の 他	五,〇六六	五.〇六	一〇〇.〇〇	五,一三三	五.一三	一〇〇.〇〇	五,二三三	五.一三	一〇〇.〇〇	五,三三三	五.一三	一〇〇.〇〇

(二歳女一〇,〇〇〇に付)

第二五圖 女二歳主要死因別死亡率の變動



(二歳女一〇,〇〇〇に付)

別死亡率は何れも男子より僅かに低い。然し、傾向は何れも之亦男子のそれと極めて類似してゐる。

(イ)「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は漸次上昇。

S.....總數
 五三.....下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)
 四八.....肺炎
 九.....赤痢及疫痢
 三〇.....腦膜炎(結核性を除く)
 五八.....其の他の消化器の疾患
 八一.....不慮の傷害
 A.....其の他
 折弧を附せるは右側の目盛に據る

(ロ) 「肺炎」は殆んど「不変」。

(ハ) 「赤痢及疫痢」は相當顯著なる上昇。

(ニ) 「其の他の消化器の疾患」は昭和一二二年迄上昇してゐるが同一三年には若干低下。

(ホ) 「脳膜炎(結核性を除く)」及「不慮の傷害」は殆んど「不変」。

五 三歳死亡率

(1) 此の年齢に至つては、男子及女子間の死亡率の差は殆んど消失して、寧ろ稍、女子の死亡率の方が高位を示すに至つてゐる(第一表参照)。

第四四表 女三歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	三、〇九二	三、四四五	三、〇七七	三、一九六	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	八、六八二	九、三三三	九、〇〇四	九、六六九	七二・七六	七四・三三	七三・四四	七四・六三		
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	二、四三五	二、六六三	二、六六七	二、八一	二〇・〇四	二二・五九	二二・六二	二二・七〇		
九 赤 痢 及 疫 痢	一、八八九	二、〇四四	二、五五五	二、四九九	一五・六二	六〇・三九	一七・三三	一八・六〇		
四八 肺 炎	一、五六六	一、五九二	一、六二七	一、五〇六	三三・一一	三三・八七	三三・三三	三三・六一		
三〇 腦 炎(結核性を除く)	一、三九四	一、四六六	一、三三六	一、四〇三	三三・一一	三三・八七	三三・三三	三三・六一		
五八 其の他の消化器の疾患	九二三	九八二	九六六	九七七	二二・五三	二二・五三	二二・五三	二二・五三		
八一 不 慮 の 傷 害	四七五	五二八	四八五	五〇三	一五・三六	一五・三六	一五・三六	一五・三六		
其 の 他	三、四一七	三、二〇三	三、四七三	三、二六七	一〇・一四	一〇・一四	一〇・一四	一〇・一四		

(4) 主要死因別死亡率を見るに(第四五表、第二五圖、第一三表及第七圖参照)

(イ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は殆んど男子と同様の高さを

示し、傾向は明瞭なる上昇。

(2) 前期に於ける傾向は殆んど「不変」であるが、後期に至つて稍、明瞭なる上昇を示し、男子の傾向と極めて類似してゐる。

(3) 主要死因の第一位は二歳と同じく「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」であつて二〇%に達し、第二位の「赤痢及疫痢」は一六%、「肺炎」一三%、「脳膜炎(結核性を除く)」一二%、「其の他の消化器の疾患」八%、「不慮の傷害」四%と云ふ順位である。男子に比し女子に於ては、「脳膜炎」と「肺炎」とが地位を轉換し、「不慮の傷害」は男子に比し女子に於て低い(第四四表参照)。

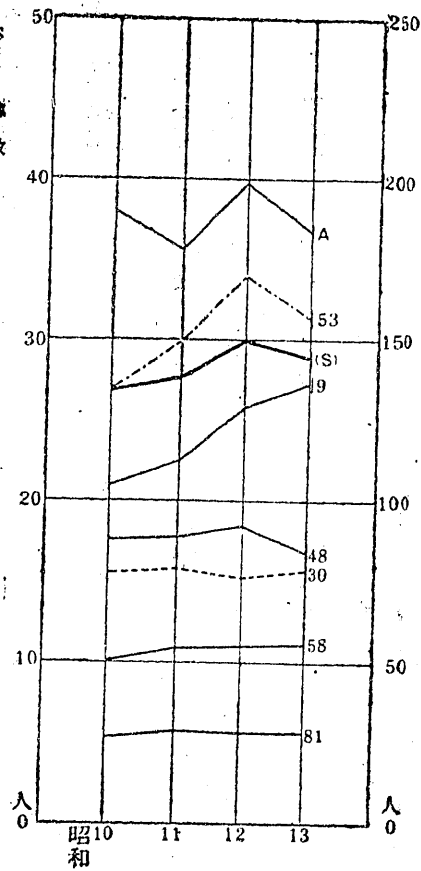
(ロ) 「赤痢及疫痢」も殆んど男子と同様の高さを示し、傾向は主要死因別死亡率中最も著しい上昇。

(ハ) 「肺炎」は男子に比し常に明かに上位を示し、傾向は男子と異つて

第四五表 女三歳主要死因別死亡率

死因	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和13年
總數	三三〇・八	二六三・三	二四九・六	二四一・六
主要死因	九六・五〇	一〇三・五	一〇九・六	一〇七・九〇
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍	二六・九五	二九・八五	三三・九	三三・七〇
九 赤痢及疫痢	三三・〇〇	三三・五	三三・八〇	二七・三
四八 肺炎	一七・六三	一七・九	一八・五	一六・八一
三〇 腦膜炎(結核性を除く)	一五・四九	一五・七五	一五・一九	一五・六六
五八 其の他の消化器の疾患	一〇・二五	一〇・二一	一〇・九五	一一・三
八一 不慮の傷害	五・六	五・七六	五・五五	五・六一
其の他の	七〇・六	三五・六三	五九・七	三六・六

第二五圖 女三歳主要死因別死亡率の變動



S.....總數
 五三.....下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)
 九.....赤痢及疫痢
 四八.....肺炎
 三〇.....腦膜炎(結核性を除く)
 五八.....其の他の消化器の疾患
 八一.....不慮の傷害
 A.....其の他

紙弧を附せるは右側の目盛に據る

殆んど「不變」。

(ニ) 「腦膜炎(結核性を除く)」も亦男子に比し常に高く、傾向は男子と同様殆んど「不變」。

(ホ) 「其の他の消化器の疾患」は男子と同様なる高さを示し、傾向は輕度の上昇。

(ハ) 「不慮の傷害」は男子に比し明かに低く、傾向としては殆んど「不變」。

六 四歳死亡率

(1) 此の年齢に於ても女子の死亡率の方が高率を示してゐるが、男子及女子間の差は三歳死亡率に於けるよりも甚だしい(第一表参照)。

(2) 前期に於ける傾向線は極めてなだらかな「上方に凸」の圓弧を描いてゐるが、後期に至つて稍、上昇を示してゐることは男子の傾向と類似してゐる。

(3) 主要死因の第一位は二歳及三歳と同様に「下痢腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」であつて一八%を示し、第二位以下は、「赤痢及疫痢」の一六%、「肺炎」一三%、「腦膜炎(結核性を除く)」一二%、「其の他の消化器の疾患」六%が三歳と同様の順位を以て之に續いて居り、これらは何れも男子に比し稍、高率を示してゐる。これに次ぐものは「結核」の五%で、男子に於ける「不慮の傷害」、「腎臓炎」と其の地位を轉換してゐることは注目に値する(第四六表参照)。

(4) 主要死因別死亡率を見るに(第四七表及第二六圖、第一五表及第八圖参照)。

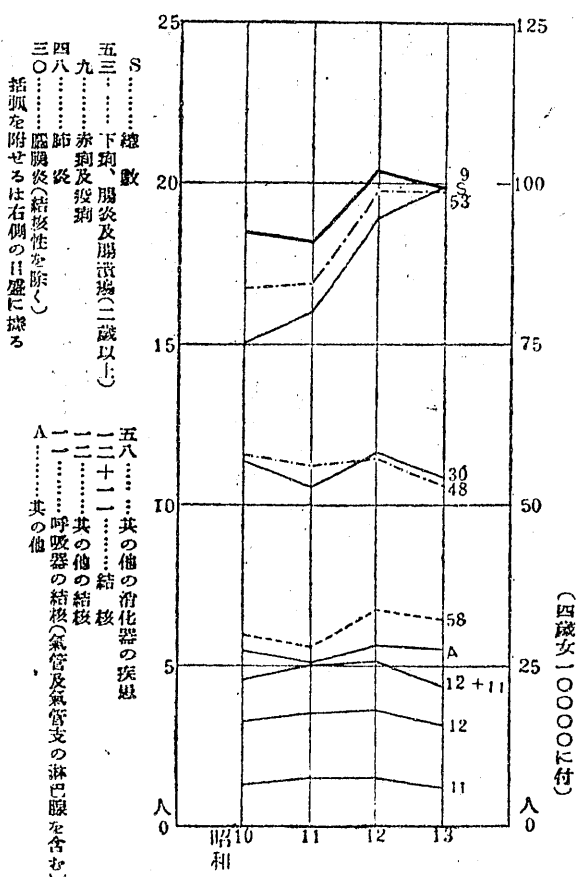
第四六表 女四歳主要死因別死亡率

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二一年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二一年	昭和一三年		
總 數	八,一七五	八,〇三二	九,〇三三	八,六六〇	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	五,七四三	五,八〇四	六,四三〇	六,一三三	70.26	71.25	71.33	71.18		
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	一,四七五	一,五〇三	一,七三三	一,六八二	18.04	18.08	19.06	19.40		
九 赤痢及疫痢	一,三三九	一,四三三	一,七六二	一,七三〇	16.26	17.07	19.28	19.85		
四八 肺 炎	一,〇三三	九九六	一,〇一〇	九三三	12.51	12.03	11.16	10.82		
三〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	一,〇〇五	九四〇	一,〇三三	九三二	12.29	11.58	11.31	10.94		
五八 其他の消化器の疾患	五三三	四九三	六〇一	五八八	6.52	6.03	6.63	6.80		
一二及一一 結 核	四〇〇	四四五	四五五	三七八	4.89	5.31	5.03	4.41		
一一 其の他の結核	二六六	三三三	三三三	二七四	3.26	3.51	3.67	3.19		
一一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の 淋巴腺を含む)	一三四	一二三	一二二	一〇四	1.51	1.55	1.36	1.22		
其の他の	二,四〇三	二,二二六	二,五〇三	二,三六七	29.07	26.10	27.77	27.63		

第四七表 女四歳主要死因別死亡率

死 因	昭和一〇年			昭和一二一年			昭和一三年		
	實 數	割 合	昭和一一年	實 數	割 合	昭和一二一年	實 數	割 合	昭和一三年
總 數	九,二四四	100.00	九,〇七六	一〇,一七六	100.00	九,九四〇	九,九四〇	100.00	九,九四〇
主 要 死 因	六,五三二	70.67	七,三〇〇	七,一七四	71.74	七,七四四	七,744	77.81	七,744
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	一,六七三	18.10	一,六八八	一,九七二	19.94	一,九四九	19.94	19.94	19.94
九 赤痢及疫痢	一,五〇六	16.30	一,八〇九	一,九〇九	19.16	一,九〇九	19.16	19.16	19.16
四八 肺 炎	二,二六九	24.54	二,一四八	二,〇六一	20.61	二,〇六一	20.61	20.61	20.61
三〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	二,二六九	24.54	二,一四八	二,〇六一	20.61	二,〇六一	20.61	20.61	20.61
五八 其他の消化器の疾患	五九四	6.43	六七六	六六六	6.69	六六六	6.69	6.69	6.69
一二及一一 結 核	四三三	4.68	五三三	四三六	4.38	四三六	4.38	4.38	4.38
一一 其の他の結核	三三四	3.62	三三三	三三三	3.34	三三三	3.34	3.34	3.34
一一 呼吸器の結核	一三九	1.50	一五二	一三〇	1.31	一三〇	1.31	1.31	1.31
其の他の	二,七三三	29.53	二,六二六	二,七二五	27.42	二,七二五	27.42	27.42	27.42

第二六圖 女四歳主要死因別死亡率の變動



最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (一)

(イ)「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子よりも常に稍、高率を示し、傾向は男子と同様明瞭なる上昇。

(ロ)「赤痢及疫痢」も男子より稍、高率を示し、主要死因別死亡率中最も著しき上昇。

(ハ)「肺炎」も男子に比し高率を示してゐるが、傾向としては輕微な下降を示す。

(ニ)「腦膜炎(結核性を除く)」は男子と殆んど同様の率を示し、相當上下してゐるが、傾向としては殆んど「不變」。

(ホ)「其の他の消化器の疾患」は男子に比し稍、高率を示し、輕度の上

(ハ)「結核」は傾向としては殆んど「不變」。

七 五―九歳死亡率

(1) 昭和一〇年及同一一年を除いて爾餘の年次に於ては男子に比し女子死亡率の方が稍、高い(第一表参照)。此の年齢階級内に於て男女死亡率の轉換が行はれてゐるから、更に之を各歳別に一瞥を投ずる必要がある。後期について見れば、五歳の死亡率は女子は男子に比し高く、六歳に於ては年次によつて相交代し、七歳、八歳及九歳に於ては一般に男子の方

第四八表 女五―九歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二一年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二一年	昭和一三年		
總 數	1,677	1,780	1,708	1,877	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因										
一 二 及 一 一 結 核	1,345	1,180	1,333	1,326	79.9	66.3	77.5	71.2		
一 二 其 他 の 結 核	309	2,040	2,108	2,084	18.4	114.9	123.4	111.8		
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 の 結 核 等 を 含 む)	75	1,331	1,351	1,754	4.5	75.3	78.7	106.9		
三 〇 腦 膜 炎 (結 核 性 を 除 く)	300	1,877	1,270	3,125	17.8	106.4	74.6	162.5		
五 三 下 痢、腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歳 以 上)	180	1,873	2,122	2,484	10.7	106.1	124.7	148.1		
四 八 肺 炎	177	1,405	1,272	1,892	10.5	83.8	74.5	100.1		
九 赤 痢 及 疫 痢	135	1,070	1,311	2,332	8.0	63.5	76.8	133.6		
五 八 其 他 の 消 化 器 の 疾 患	124	1,131	1,328	1,352	7.4	67.2	77.8	79.7		
五 九 腎 臟 炎	95	926	1,001	977	5.6	55.3	58.7	57.7		
八 一 不 慮 の 傷 害	66	121	77	82	3.9	7.2	4.5	4.7		
其 他	52	60	61	52	3.1	3.6	3.5	3.1		

が稍、高き傾がある(第二表参照)。

(2) 前期に於ける傾向は極めて微弱なる低下を幸ふじて認め得る程度であるが、後期に於ては明瞭なる上昇を示してゐること男子と殆んど同様である。

(3) 後期について第二表に據つて之を各歳別に見るに、特に顯著なる上昇を認め得るのは五歳の死亡率であつて此の點男子と同様である。此の年齢の死亡率は前期を通じて上昇を示し更に後期に於ても上述の如く上昇を繼續してゐるのであつて頗る注意を要する。五歳に亞いで九歳に於て稍、上昇の傾向を認めるが爾餘の年齢に於ては殆んど「不變」と見てよい。従つて五―九歳の死亡率の上昇は主として五歳の上昇によると見

第四九表 女五―九歳主要死因別死亡率

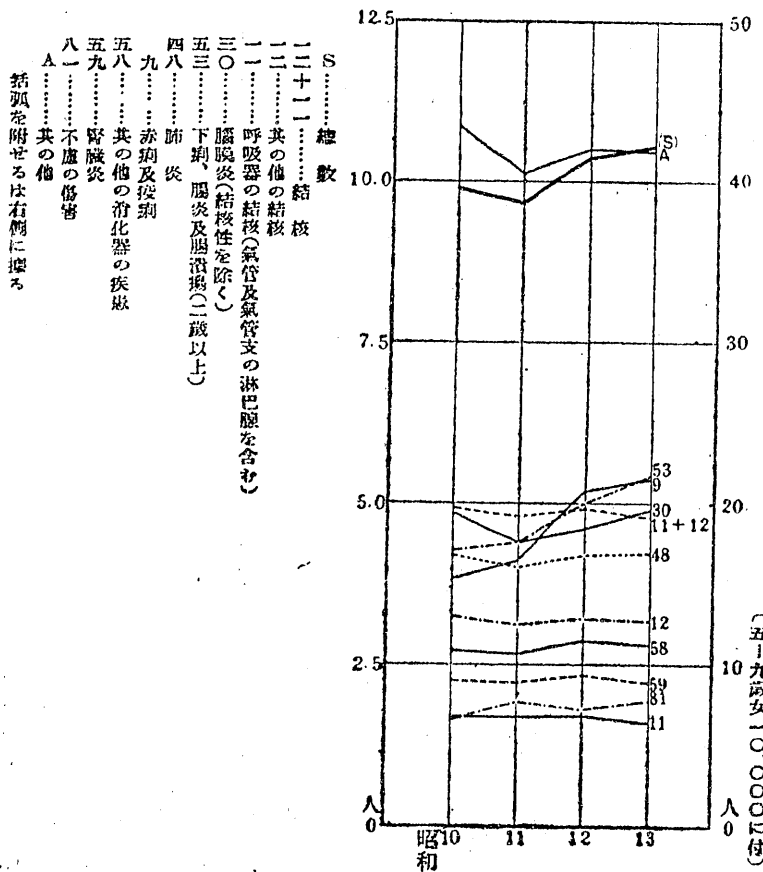
(五―九歳女一〇,〇〇〇人付)

死 因	昭和二年	昭和三年	昭和三年
總 數	元・六	元・七	四・三
主 要 死 因	二・七	二・六	三・七
一 二 及 一 一 結 核	四・四	四・八	四・七
一 二 其 他 の 結 核	三・五	三・三	三・九
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 等 含 む)	一・六	一・六	一・六
三 〇 腦 膜 炎 (結 核 性 を 除 ぐ)	四・七	四・四	四・九
五 三 下 痢、腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歳 以 上)	四・七	四・〇	五・四
四 八 肺 炎	四・九	四・〇	四・三
九 赤 痢 及 疫 痢	三・八	四・二	五・六
五 八 其 他 の 消 化 器 の 疾 患	二・七	二・六	二・八
五 九 腎 臟 炎	二・五	二・三	二・三
八 一 不 慮 の 傷 害	一・六	一・九	一・九
其 他	一〇・六	一〇・三	一〇・七

最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (一)

第二七圖 女五―九歳主要死因別死亡率の變動

(五―九歳女一〇,〇〇〇人付)



られる。

(4) 此の年齢階級の主要死因の第一位を占めるものは「結核」であつて一二%を示し、第二位の「脳膜炎(結核性を除く)」亦約一二%、「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」及「肺炎」夫々一一%、「赤痢及疫痢」一〇%、「其の他の消化器の疾患」七%、「腎臓炎」六%、及「不慮の傷害」四%である(第四八表参照)。男子に比し特に著しき差異の認められるのは、女子に於ては「不慮の傷害」の地位が著しく下つてゐることである(第一六表比較参照)。

(5) 主要死因別死亡率を見るに(第四九表、第二七圖、第一七表及第九圖參照)。

(ハ) 「其の他の消化器の疾患」も亦男子に比し常に高く、傾向は、男子と同様、輕微なる上昇。

(イ) 「結核」は男子に比し常に稍高く、傾向は男子同様「不變」。

(ト) 「腎臟炎」は男子に比し低く、傾向は「不變」。

(ロ) 「腦膜炎」(結核性を除く)は男子に比し僅かに低く、傾向は、男子に於ては低下を示してゐるが、女子に於ては相當明瞭なる上昇。

(チ) 「不慮の傷害」は男子に比し著しく低く、傾向は輕微なる上昇。

(ハ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は常に男子に比して高く、傾向は、男子と同様に、顯著なる上昇。

(六) 後期に於て五―九歳死亡率を高めてゐるものは「赤痢及疫痢」「下痢、腸炎及腸潰瘍」及「腦膜炎」に之を歸することが出来る。

(ニ) 「肺炎」も亦男子に比し常に高く、傾向は殆んど「不變」。

八一〇―一四歳死亡率

(ホ) 「赤痢及疫痢」も亦男子に比して常に高く、傾向は、男子と同様、最も著しき上昇。

(一) 此の年齢階級に至つて男子に比し女子死亡率が明かに高くなる(第一表參照)。

第五〇表 女一〇―一四歳主要死因別死亡

死 因	實 數					制 割				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	三、一四四	一四、三四四	一四、五五〇	一五、五六一	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇		
主 要 死 因	九、六三三	一〇、六八八	一〇、七三三	一一、九八一	七〇・四五	七〇・二〇	七〇・五五	七〇・三三		
一 二 及 一 二 結 核	五、三六六	五、九二二	五、九二〇	六、〇九〇	四〇・〇九	四一・四四	四〇・九七	三九・六六		
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支、淋 巴 腺 を 含 む)	三、三三三	三、五九九	三、五三三	三、六五五	二四・六一	二五・〇九	二四・七七	二三・三〇		
一 二 其 の 他 の 結 核	二、〇三三	二、三六六	二、三九九	二、四四五	一五・四五	一六・三六	一六・六〇	一五・三六		
三 〇 腦 膜 炎 (結 核 性 を 除 く)	九、九六	九、九六	一〇、一一一	一〇、一三三	七・四四	七・四五	七・〇〇	七・二九		
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	九、六一	一〇、〇四一	一〇、一七三	一〇、三三〇	七・三三	七・四四	七・三三	七・八三		
四 八 肺 炎	八、〇四	八、七七一	八、五五	九、三九	六・三三	六・〇九	六・二九	六・二五		
五 九 腎 臟 炎	一、〇〇一	一、〇〇一	一、〇一〇	一、一五	四・六六	四・一七	四・二九	四・六六		
四 九 肋 膜 炎	五、五五	五、五五	六、一一一	六、三九	四・〇九	四・一五	四・三〇	四・八五		
五 三 下 痢、腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歳 以 上)	五、〇九	五、五五	五、七三	六、六四	三・八六	三・六六	三・九六	四・三九		
其 の 他	三、二九〇	三、七六六	三、七六〇	四、〇一一	二六・五五	二六・一〇	二五・五五	二五・八七		

第二表について見るに此の間各年齢共に女子が高いが、その差は後年齢に至る程著し。

(2) 前期を通じて稍、明かに下降の傾向を示してゐるが、後期に於ては五―九歳と略、同様の明瞭なる上昇を認めることが出来る。此の傾向は男子と極めて類似してゐる。

(3) 後期について第二表に據つて之を各歳別に見るに、各歳共略「同様に比較的軽度の上昇を示してゐる。

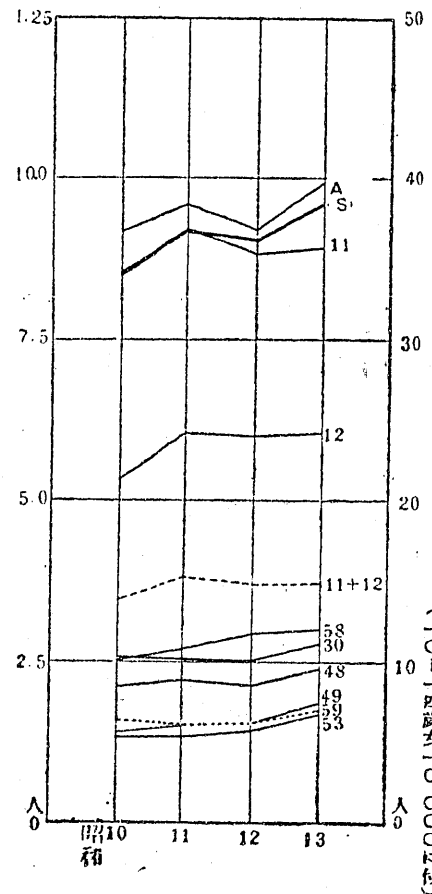
(4) 此の年齢階級の主要死因の第一位を占めるものは「結核」であつて四〇%の多きに達し、以下順次「脳膜炎(結核性を除く)」及「その他の消化器の疾患」夫々七%、「肺炎」六%、「腎臓炎」五%、「肋膜炎」及「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」夫々四%である(第五〇表参照)。男

第五一表 女一〇―一四歳主要死因別死亡率

死 因	(一〇―一四歳女一〇,〇〇〇人付)			
	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
總 數	三三・五	三六・三	三六・四	三六・四
主 要 死 因	三五・五	二七・五	二六・九	二八・四
一 一 一 結 核	一三・八	一五・三	一四・八	一四・六
一 一 二 呼吸器の結核(氣管及氣管支の結核を含む)	八・四	九・二	八・八	八・九
一 一 三 其の他の結核	五・三	六・〇	六・〇	六・五
三 〇 腦 膜 炎(結核性を除く)	二・七	二・五	二・五	二・九
五 八 其の他の消化器の疾患	二・五	二・九	二・四	三・〇
四 八 肺 炎	二・二	二・三	二・四	二・四
五 九 腎 臓 炎	一・五	一・四	一・五	一・七
四 九 肋 膜 炎	一・四	一・五	一・五	一・六
五 三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	一・三	一・四	一・三	一・六
其の他の	九・六	九・五	九・三	九・九

最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向 (豫報) (二)

第二八圖 女一〇―一四歳主要死因別死亡率の變動



一 一 一 一 一 結核
 一 一 二 呼吸器の結核(氣管及氣管支の淋巴腺を含む)
 一 一 三 其の他の結核
 三 〇 腦膜炎(結核性を除く)
 五 八 其の他の消化器の疾患
 四 八 肺炎
 五 九 腎臓炎
 四 九 肋膜炎
 五 三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)
 △ 其の他の
 括弧を附せるは右側の目盛に據る

子に比し女子に於ては主要死因は「結核」に對して集中的である。男子主要死因中「不慮の傷害」「膿毒症及敗血症」及心臟疾患は女子主要死因中には入つて來ない(第一八表比較参照)。

(5) 主要死因別死亡率を見るに(第五一表、第二八圖、第一九表及第一〇圖参照)。

(イ) 「結核」は男子に比し著しく高く二倍以上の高率に達してゐることは注目し得る。傾向は軽度の上昇。

(ロ) 「脳膜炎(結核性を除く)」は男子と略、同様の高さを示し、傾向

は男子同様軽度の上昇。

(ハ) 「其の他の消化器の疾患」は男子に比し明かに高く、傾向は上昇。

(ニ) 「肺炎」も亦男子に比し高く、傾向は軽度の上昇。

(ホ) 「腎臓炎」も亦男子に比し高く、傾向は軽度の上昇。

(ヘ) 「肋膜炎」は男子に於ては主要死因中に入つてゐない。傾向は上昇。

(ト) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子に比して僅かに高く、傾向は男子同様上昇。

九 一五—一九歳死亡率

(1) 此の年齢階級に於ても男子に比し女子死亡率が明かに高い(第一表参照)。

第二表について見るに此の間各年齢共に女子が高いが、一〇—一四歳とは逆に、その差は後年齢に至る程少くなつてゐる。

(2) 前期に於ては低下の傾向を認めることが出来るが、後期に於ては、男子と同様、他の年齢階級に比し最も顯著なる上昇を示してゐる。

(3) 後期について之を各歳別に見るに(第二表参照)、特に顯著なる上昇を示してゐるのは一五歳、一九歳及一七歳である。

(4) 主要死因第一位の「結核」は此の年齢階級に至つて著しく其の地位を擴大し、五四%の多きに達してゐる。第二位は「其の他の消化器の疾患」であるが割合を著しく減じて六%、以下、「肋膜炎」五%、「肺炎」四%、「脳膜炎(結核性を除く)」三%である(第五二表参照)。

男子の主要死因と比較して特に注目すべき點は、女子に於ては、男子に於て第二位を占める「不慮の傷害」が全然主要死因中に現はれてゐな

第五二表 女一五—一九歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	三六、五五五	三九、七三九	四〇、二四二	三九、七六六	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇		
主 要 死 因	一九、四七二	二〇、二四四	二〇、二四二	二〇、七六四	五三.三	五〇.八五	五〇.〇九	五二.六〇		
一 一 及 二 結 核	一四、一〇一	一六、四一八	一七、〇七二	一七、七六六	三五.八五	四一.四	四二.三三	四四.三三		
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 の 淋 巴 腺 を 含 む)	一〇、一四四	一一、五七九	一一、九六九	一二、一七二	二七.七	二九.六六	二九.六七	三〇.七五		
一 二 其 の 他 の 結 核	四、〇六八	四、八六五	五、二七三	五、五九二	一一.一	一二.一六	一三.〇六	一三.七五		
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	一、六六八	一、八三三	一、九三三	二、一三八	四.六	四.六二	四.八	五.五		
四 九 肋 膜 炎	一、四九九	一、六一一	一、六六八	一、七〇九	四.一	四.三	四.二	四.三		
四 八 肺 炎	一、一六三	一、三三四	一、三三〇	一、三三一	三.二	三.三六	三.三	三.三		
三 〇 腦 膜 炎 (結 核 性 を 除 く)	八九〇	九八八	一、〇四九	一、一六九	二.四	二.四九	二.六四	二.九四		
其 の 他	七、〇八四	七、四七五	七、二〇八	七、九四四	一九.一	一八.八	一七.九	一九.〇		

ことである。その結果女子に於ては「結核」の割合が男子に比し八% 餘も擴大を示してゐる(第二〇表比較参照)。

(5) 主要死因別死亡率を見るに(第五三表、第二九圖、第二一表及第二一圖参照)。

(イ) 「結核」は男子に比し著しく高く常に一〇%餘の差を示してゐる。前項の如く女子の「結核」は男子に比し常に主要死因中の割合が大なるのみならず、その死亡率に於ても明かに高いことが認められる。傾向は明瞭なる上昇。

(ロ) 「其の他の消化器の疾患」も亦男子に比して高い。傾向は上昇。

(ハ) 「肋膜炎」も亦男子に比して高く、傾向は(ロ)と殆んど平行に上昇。

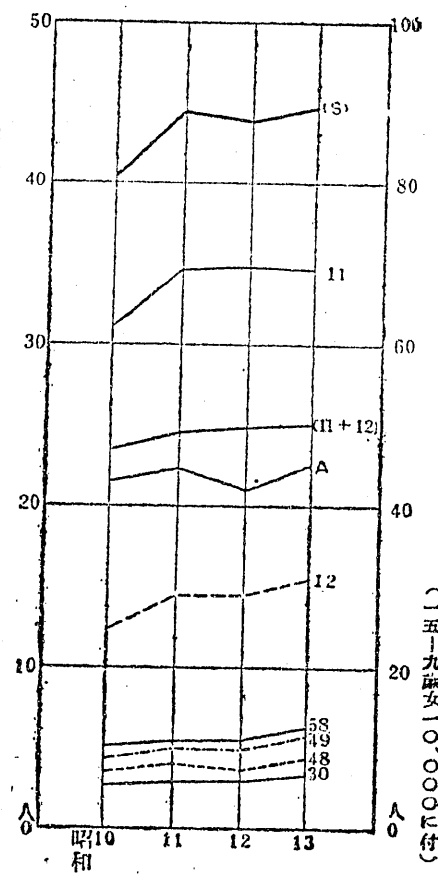
(ニ) 「肺炎」も亦男子に比して高く、傾向は上昇。

第五三表 女一五—一九歳主要死因別死亡率

死	因	昭和二年	昭和二年	昭和三年	昭和三年
總	數	八〇・七一	八七・八五	九三・七五	九三・七五
主	要	五九・八	六六・五〇	六九・七六	六九・八四
一	一 結核	四三・四七	四九・〇九	四九・七〇	五〇・一一
一	一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の 淋巴腺を含む)	三三・二三	三三・〇三	三三・八二	三三・六五
一	二 其の他の結核	一〇・二四	一四・〇七	一五・八九	一五・四五
五	八 其の他の消化器の疾患	五・一〇	五・四八	五・五九	六・三三
四	九 肋膜炎	四・三七	四・九七	四・九一	五・七五
四	八 肺炎	三・五三	四・〇三	三・六一	四・六六
三	〇 腦膜炎(結核性を除く)	二・七〇	二・九五	二・六	三・三〇
其	の	三・三三	三・三三	二〇・六	三・三三

最近に於ける我が國死亡率の若干の傾向(豫報)(一)

第二九圖 女一五—一九歳主要死因別死亡率の變動



S……………總數
 一一二……………結核
 一一……………呼吸器の結核(氣管及氣管支の淋巴腺を含む)
 一二……………其の他の結核
 五八……………其の他の消化器の疾患
 四九……………肋膜炎
 四八……………肺炎
 三〇……………腦膜炎(結核性を除く)
 A……………其他
 括弧を附せるは右側の目盛に據る。

(ホ) 「腦膜炎(結核性を除く)」は男子と殆んど同様。傾向は上昇。

以上の如く「結核」は云ふ迄もなく、「肋膜炎」「肺炎」等の死因中に於ける地位及傾向から見て、此の年齢階級に於て「結核」の慘禍は特に著しく、男子に比し殊に然りである。加之、女子に於ても亦、最近此の慘禍は此の年齢階級に於て著しく擴大せられつつあると認めねばならぬ。

一〇二〇—二四歳死亡率

(1) 從來、此の年齢階級に於ては女子死亡率が男子のそれに比し明かに

高かつたのであるが、昭和一〇年、一一年及一二年に於て男子と其の地位を轉換するに至つてゐることは頗る注目し得る。第六回生命表に現はれた此等の年齢に於ける男女死亡率の轉換と相關聯する重要な事實であると思ふ(註)(第一表参照)。

註 (1) 高津英雄氏「男女別に見たる死亡率の變化」—内閣統計局「統計時報」第九八號、昭和一五年六月

(2) 第一表によれば、昭和一三年に於ては再轉して僅かに女子死亡率が男子死亡率を超えてゐる。但し其の差は極めて小である。而して、本稿に於て死亡率算定に使用したる推計年齢別人口は昭和一〇年以後補外法により且修正を加へてゐないから此の數字のみを以て果して男女死亡率の再轉換が、昭和一三年に於て、起つてゐるか否か明確には斷定し得ない(館録・窪田嘉彰稿「國勢調査間年次に於ける男女年齢別人口の推計(一)」—本誌

第一卷第二號、昭和一五年五月参照)。
第二表について見るに以上の傾向は特に二一歳及二二歳に於て顯著である。

(2) 既に一言した通り、男子は前期に於て明かなる上昇を認め得たのであるが、之に反して女子に於ては明瞭なる低下の傾向を認めることが出来る(前號所載本稿三九頁参照)。後期に於ては男子と殆んど同様の上昇を認め得る。前項の男女死亡率の轉換の理由は主として男子死亡率の上昇に見出し得る(第一表及第三〇圖参照)。

(3) 後期について之を各歲別に見るに(第二表参照)、特に顯著なる上昇を示してゐるのは二〇歳及二三歳である。

(4) 主要死因の第一位は「結核」であつて、男子に於ては此の年齢階級

第五四表 女二〇—二四歳 主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	二六,二四三	三〇,二四一	二九,四二〇	三〇,一八〇	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇	一〇〇.〇〇		
主 要 死 因	二〇,〇〇〇	二二,六三三	二二,六八八	二二,九三三	七六.〇〇	七五.〇〇	七七.〇〇	七五.〇〇		
一 一 及 一 二 結 核	一三,九五四	一四,九六五	一四,九六八	一五,〇六五	四九.四一	四九.五五	四九.八二	四九.六二		
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 の 淋 巴 腺 を 含 む)	一〇,一五四	一一,〇五四	一〇,八八八	一〇,七九八	三六.三三	三六.五五	三六.九三	三六.五五		
一 二 其 の 他 の 結 核	三,七〇〇	三,九三三	四,〇九二	四,三三六	一三.一〇	一三.〇〇	一三.九〇	一三.一〇		
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	一,六一	一,六八九	一,六六一	一,七九六	五.九三	五.五三	五.六〇	五.九五		
四 九 肋 膜 炎	一,三三三	一,四九九	一,四六六	一,五二二	四.六八	四.八六	四.九七	五.〇七		
四 八 肺 炎	一,三二二	一,五九三	一,三八〇	一,四〇二	四.六四	五.二七	四.六六	四.五二		
七 九 自 殺	九五〇	九六〇	八八四	六六六	三.六三	三.二四	三.〇〇	二.三二		
五 九 腎 臟 炎	八四七	九三三	九一九	一,〇三二	三.二四	三.〇九	三.二二	三.三五		
其 の 他	八,二六八	八,六〇〇	八,二〇二	八,二四八	二六.九六	二八.四七	二七.八一	二七.七九		

に於て「結核」の主要死因中に占める地位は頂點に達したこと前號に於て述べたる如くであるが、女子に於ては前述の通り、一つ以前の年齢階級、即ち、一五―一九歳に於て頂點に達し、二〇―二四歳に至つて若干其の割合を減じ、四九%を示してゐる。以下順次、「其の他の消化器の疾患」六%、「肋膜炎」及「肺炎」が夫々五%、「自殺」及「腎臓炎」が夫々三%である(第五四表参照)。

男子の主要死因と比較するに、「不慮の傷害」が主要死因中から消えてゐるが、男子に見られなかつた「肺炎」及「腎臓炎」が現はれてゐる(第三表比較参照)。

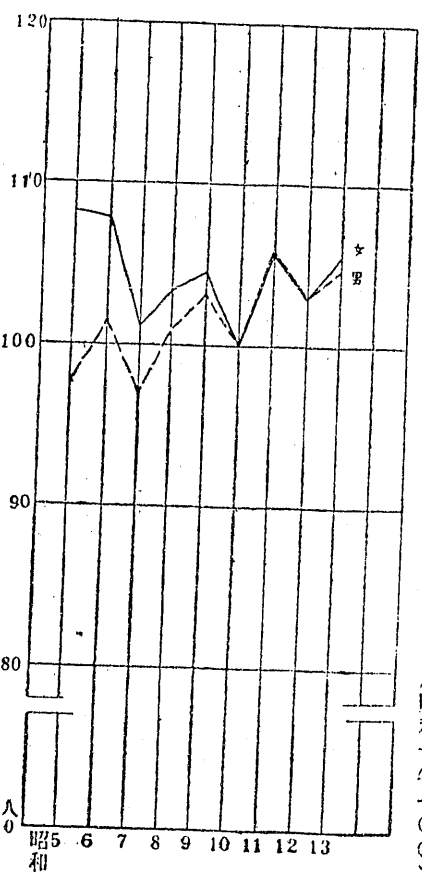
(5) 主要死因別死亡率を見るに(第五五表、第三〇、三一圖、第二三表及第二二圖参照)。

第五五表 女二〇―二四歳主要死因別死亡率

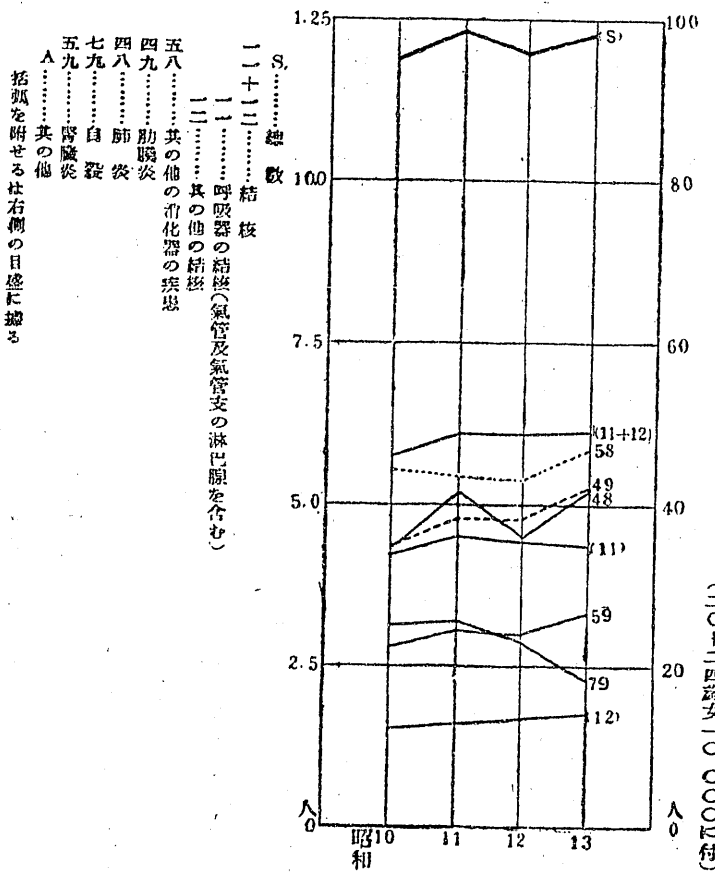
死 因	二〇―二四歳女(10,000に付)		
	昭和10年	昭和11年	昭和12年
總 數	93.8	96.4	95.3
主 要 死 因	66.3	70.4	70.9
一 二 及 一 二 結 核	59.9	64.6	69.0
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 の 結 核)	53.7	55.9	59.4
一 二 其 の 他 の 結 核	3.2	3.8	3.3
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	5.4	5.4	5.7
四 九 肋 膜 炎	4.5	4.7	5.6
四 八 肺 炎	4.3	5.1	4.9
七 九 自 殺	3.3	3.1	2.8
五 九 腎 臟 炎	2.9	3.0	2.9
其 の 他	3.9	4.0	3.6

最近に於ける我が國死亡率若干の傾向 (豫報) (二)

第三〇圖 二〇―二四歳男女死亡率指數比較



第三一圖 女二〇―二四歳主要死因別死亡率の變動



- (イ) 「結核」は男子と殆んど同様で、上昇。
- (ロ) 「其の他の消化器の疾患」は男子に比し明かに高く、傾向は上昇。
- (ハ) 「肋膜炎」は男子と殆んど同様にして、傾向は顯著なる上昇。
- (ニ) 「肺炎」は軽度の上昇。
- (ホ) 「自殺」は男子に比し明かに低い、傾向は男子同様、著しき低下。
- (ヘ) 「腎臓炎」は上昇。

二五—二九歳死亡率

第五六表 女二五—二九歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	三、二二二	三、〇八五	三、五五六	三、七九〇	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	一、五三三	一、六〇八	一、七〇〇	一、八二四	七二.94	七三.24	七三.19	七三.26		
一一及一二 結 核	八、八六四	九、八六九	九、九六六	一〇、三三三	四二.89	四二.75	四三.40	四二.80		
一一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の結核を含む)	六、七〇〇	七、五五六	七、四五六	七、七三〇	三三.94	三三.77	三三.33	三三.32		
一二 其の他の結核	二、一〇四	二、三〇三	二、五〇〇	二、六〇三	九.94	九.98	一〇.76	一〇.78		
四八 肺 炎	一、一七三	一、四九五	一、三六九	一、六八三	五.54	六.04	五.99	六.79		
五八 其の他の消化器の疾患	一、二六四	一、二〇一	一、二八	一、二八四	五.50	五.32	五.17	五.18		
五九 腎 臟 炎	八九〇	八九七	九二二	一、〇三二	四.32	三.89	三.91	四.16		
四九 肋 膜炎	七五三	八七六	九三三	一、〇七四	三.55	三.79	三.91	四.34		
八五 不明の診断及不詳の原因	六七〇	七三六	六四四	七五三	三.10	三.14	三.12	三.04		
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	六二七	六五五	七二九	八二四	二.93	二.84	三.05	三.33		
四〇 慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障礙	五六七	六二二	六五四	六九一	二.77	二.65	二.77	二.79		
七九 自 殺	五九九	五七六	五三七	四五三	二.55	二.50	二.58	一.83		
其の他の	五、九九九	六、一七七	六、五五八	六、六三三	二六.06	二六.76	二七.81	二六.74		

(1) 此の年齢階級に於ては女子死亡率が再び男子のそれに比し高い。しかしその差は後期に於ては極めて接近してゐる(第一表参照)。

(2) 前期に於ては明かに低下の傾向を示してゐるが、後期に於ては上昇を示してゐることは前階級二〇—二四歳と同様である。

(3) 後期に就て各歳別に見ると、二七歳が最も著しい上昇を示し、二八歳及二九歳が之に次ぎ、二五歳及二六歳の上昇傾向はさして著しくない。男子が此の年齢階級に於て一概に上昇を示してゐるのに比し稍と複雑してゐる(第二表参照)。

(4) 主要死因の第一位は依然「結核」で、前年齢階級に比し稍々減少せりとはいへ猶四二%に達してゐる。第二位は前階級と異なり「肺炎」、第三位が「其の他の消化器の疾患」で各六%を占めてゐる。以下「腎臓炎」「肋膜炎」の各四%、「不明の診断及不詳の原因」、「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」、「慢性心臓内臓炎及心臓瓣膜の障碍」「自殺」の各三%である(第五六表参照)。

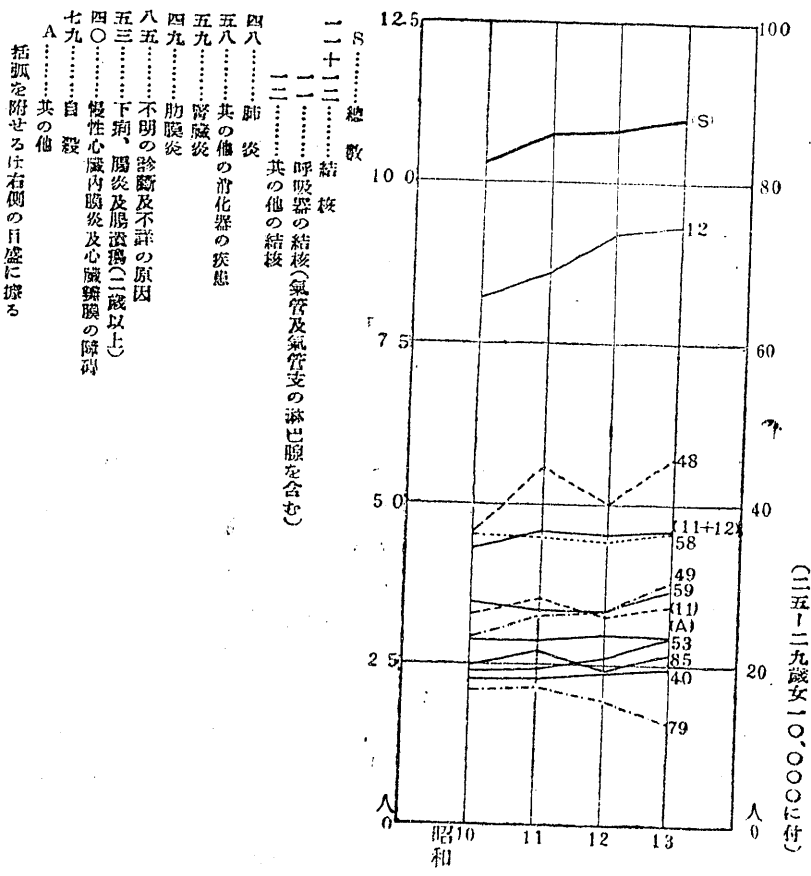
男子に比し、女子の主要死因は此の年齢階級に於て既に分散的になつて来る。又男子に於て「結核」に次いで第二位にあつた「不慮の傷害」に代つて、女子に於ては「腎臓炎」が可なり上位にあり、「不明の診断

第五七表 女二五―二九歳主要死因別死亡率

死因	昭和二年	昭和三年	昭和四年
總數	八二・五	八五・九	八七・六
主要死因	五九・四	六二・九	六二・九
一 一 及 一 二 結核	三〇・九	三六・七	三六・三
一 一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の結核)	二六・三	二八・七	二七・〇
一 二 其の他の結核	八・九	八・五	九・三
四 八 肺 炎	四・六	五・五	五・〇
五 八 其の他の消化器の疾患	四・五	四・八	四・四
五 九 腎 臓 炎	三・四	三・四	三・四
四 九 肋 膜 炎	三・三	三・三	三・六
八 五 不明の診断及不詳の原因	二・九	二・七	二・八
五 三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	二・四	二・四	二・六
四 〇 慢性心臓内臓炎及心臓瓣膜の障碍	二・六	二・六	二・三
七 九 自 殺	二・〇	二・四	二・五
其の他の	三・二	三・〇	三・七

最近に於ける我が國死亡率若干の傾向 (豫報) (一)

第三二圖 女二五―二九歳主要死因別死亡率の變動 (二五―二九歳女一〇,〇〇〇に付)



及不詳の原因、「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」、「慢性心臓内臓炎及心臓瓣膜の障碍」が主要死因中に加はつてゐる(第二四表比較参照)。

(5) 主要死因別死亡率を見るに(第五七表、第三二圖、第二五表及第一三圖参照)。

- (イ) 「結核」は男子に比し低く傾向は殆んど「不變」。
- (ロ) 「肺炎」は男子に比し高く前年齢階級同様軽度の上昇。
- (ハ) 「其の他の消化器の疾患」は男子に比し高く殆んど「不變」。

(ニ) 「腎臓炎」は前年齢階級に比し高率となり、昭和一三年に至つて稍
 稍上昇の傾向を示す。

(ホ) 「肋膜炎」は男子に比し僅かに高く、傾向は前階級同様著しき上
 昇。

(ハ) 「不明の診断及不詳の原因」は一上一下してゐるが傾向としては
 「不變」。

第五八表 女三〇—三四歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	一七,七五八	一八,五三三	二七,八三三	一九,一六四	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	一三,六三三	一三,五八八	二二,八四五	一四,〇五五	七六.三六	七三.〇六	七三.〇三	七三.二四		
一 一 及 一 二 結 核	五,三四二	五,九六六	五,五九四	五,九〇八	三〇.〇八	三二.一	三二.五	三〇.八三		
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 の 淋 巴 腺 を 含 む)	四,〇〇九	四,五八八	四,一三六	四,〇〇〇	二二.七五	二四.六八	二三.〇三	二三.九六		
一 二 其 の 他 の 結 核	一,三二四	一,九八八	一,四六八	一,五〇八	七.四四	七.五	八.三三	七.八七		
四 八 肺 炎	九八三	一,一九七	九九八	一,三九九	五.五九	六.四五	五.〇〇	七.三〇		
五 九 腎 臟 炎	九八九	一,〇〇九	一,〇一〇	一,一五九	五.五七	五.四五	五.〇六	五.九四		
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	八三三	九〇二	八七一	九三三	四.八〇	四.八六	四.八八	四.九七		
八 五 不 明 の 診 断 及 不 詳 の 原 因	七五五	七五九	六四五	七四五	四.二五	四.〇九	四.〇三	三.八九		
一 八 癌、其の他の悪性腫瘍	七九	七四	七四	六八四	四.一一	四.〇〇	四.〇〇	四.〇〇		
四 〇 慢 性 心 臟 内 膜 炎 及 心 臟 瓣 膜 の 障 碍	六八	六五七	一〇一	六八八	三.八四	三.五九	三.七	三.三三		
五 三 下 痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	六二五	六二二	六三〇	七二二	三.五三	三.二九	三.二六	三.七一		
四 九 肋 膜 炎	五三三	五四三	五四四	六九九	三.〇〇	三.〇三	三.〇三	三.〇三		
七 九 自 殺	四四四	四三三	四四四	五八三	二.四九	二.三七	二.二八	二.〇〇		
三 二 腦 出 血、腦 栓 塞 及 腦 血 栓	四〇七	四六七	四四六	四六七	二.二九	二.五二	二.五〇	二.四四		
一 腸 チ フ ス 及 パ ラ チ フ ス	三六六	三三三	三三八	三九九	二.〇六	一.七九	一.八四	一.九三		
其 の 他	五,一〇四	五,〇〇九	四,九二一	五,三三九	二八.七三	二六.九四	二七.六八	二八.七六		

(1) 此の年齢階級に於ける女子死亡率も男子のそれに比し高いが、其の

一三三〇—三四歳死亡率

- (ト) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は明かな上昇。
- (チ) 「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍」は上昇。
- (リ) 「自殺」は男子よりも低く、前階級同様著しき低下。

差は前年階級に比し遙に著しい。しかし其の差はやはり後期に於ては少い(第一表参照)。

(2) 前期に於ては男子死亡率が依然上昇の傾向を示してゐるのに反して女子に於ては前年階級同様明瞭に低下の傾向を示してゐる。後期に於ては前階級と異なり殆んど「不変」である(第一表及第一九圖参照)。

(3) 後期に就いて之を各歳別に見るに(第二表参照)、各年齢とも其の率甚だ接近してゐる。三四歳のみは稍々上昇の傾向を示し、爾餘の年齢は男子に於けると同様傾向としては「不変」である。

(4) 主要死因の第一位はやはり「結核」で、前年階級に比し更に減少してゐるが猶三〇%を占めてゐる。前階級と同じく第二位は「肺炎」で六%、第三位は「腎臓炎」六%、第四位は「其の他の消化器の疾患」五%で前階級に比し其の地位は轉倒してゐる。之に續くは前階級に比し其の地位を上昇した「不明の診断及不詳の原因」四%、初めて主要死因中に現はれた「癌、其の他の悪性腫瘍」四%、「慢性心臓内膜炎及心臟瓣膜の障碍」四%、「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」前階級に比し著しく地位を低めた「肋膜炎」、「自殺」は各三%である。更に之等に續いて「腦出血、腦栓塞及腦血栓」、「腸チフス及パラチフス」各二%が初めて主要死因中に現はれて来る(第五八表参照)。

これ等主要死因は、前年階級若くは男子の此の年齢階級に比し一層分散的である。男子に於て第二位を占める「不慮の傷害」は主要死因中に現はれぬが、男子に於て下位にある「腎臓炎」は女子に於てはやはり上位にある。男子に於て次の年齢階級に初めて現はれる「癌、其の他の悪性腫瘍」が既に現はれてゐる。「腦出血、腦栓塞及腦血栓」が低位な

から主要死因中に加はるに至つたことは男子と同様である(第二六表比較参照)。

(5) 主要死因別死亡率を見るに(第五九表、第三三圖、第二七表及第一四圖参照)、
(イ)「結核」は前年階級より更に下りやはり男子に比し低い。傾向としては殆んど「不変」。

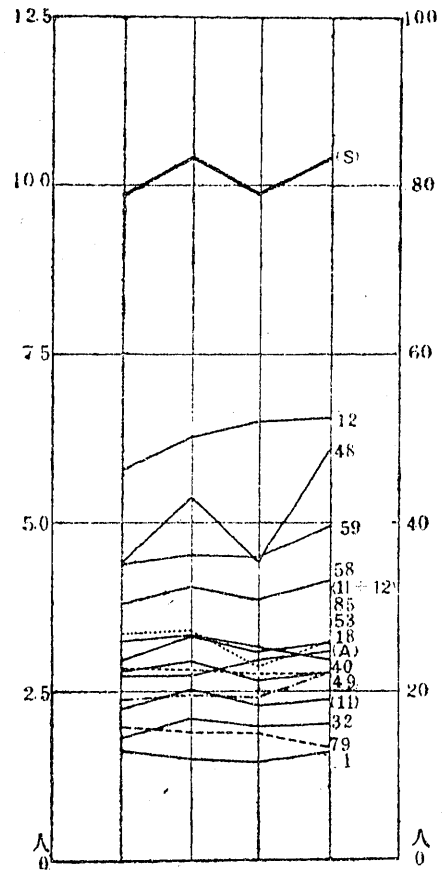
第五九表 女三〇—三四歳主要死因別死亡率

(三〇—三四歳女一〇,〇〇〇に付)

死 因	昭和二年				昭和三年				昭和四年			
	主	要	死	因	主	要	死	因	主	要	死	因
總 數	七六・八	八三・三	九〇・四	八三・元	七六・八	八三・三	九〇・四	八三・元	七六・八	八三・三	九〇・四	八三・元
一 一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の炎症を含む)	二七・九	二〇・三	一八・二	一八・三	二七・九	二〇・三	一八・二	一八・三	二七・九	二〇・三	一八・二	一八・三
二 二 其の他の結核	五・七	六・七	六・五	六・五	五・七	六・七	六・五	六・五	五・七	六・七	六・五	六・五
四 八 肺 炎	四・四	五・七	四・四	四・四	四・四	五・七	四・四	四・四	四・四	五・七	四・四	四・四
五 九 腎 臓 炎	四・元	四・五	四・四	四・九	四・元	四・五	四・四	四・九	四・元	四・五	四・四	四・九
五 八 其の他の消化器の疾患	三・九	四・〇	三・六	三・六	三・九	四・〇	三・六	三・六	三・九	四・〇	三・六	三・六
八 五 不明の診断及不詳の原因	三・五	三・四	二・六	三・四	三・五	三・四	二・六	三・四	三・五	三・四	二・六	三・四
一 八 癌、其の他の悪性腫瘍	三・四	三・三	三・六	三・七	三・四	三・三	三・六	三・七	三・四	三・三	三・六	三・七
四 〇 慢性心臓内膜炎及心臟瓣膜の障碍	二・九	二・九	二・六	二・七	二・九	二・九	二・六	二・七	二・九	二・九	二・六	二・七
五 三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	二・五	二・四	二・七	二・七	二・五	二・四	二・七	二・七	二・五	二・四	二・七	二・七
四 九 肋 膜 炎	二・三	二・四	二・四	二・六	二・三	二・四	二・四	二・六	二・三	二・四	二・四	二・六
七 九 自 殺	一・九	一・八	一・八	一・六	一・九	一・八	一・八	一・六	一・九	一・八	一・八	一・六
三 二 腦出血、腦栓塞及腦血栓	一・八	二・〇	一・八	二・〇	一・八	二・〇	一・八	二・〇	一・八	二・〇	一・八	二・〇
一 腸チフス及パラチフス	一・三	一・四	一・五	一・六	一・三	一・四	一・五	一・六	一・三	一・四	一・五	一・六
其の他の	三・三	三・四	三・三	三・三	三・三	三・四	三・三	三・三	三・三	三・四	三・三	三・三

第三三圖 女三〇—三四歳主要死因別死亡率の變動

(三〇—三四歳女一〇,〇〇〇に付)



- 一一二 結核
 - 一一三 呼吸器の結核(氣管及氣管支の淋巴腺を含む)
 - 一一四 其の他の結核
 - 四八 肺炎
 - 四九 腎臓炎
 - 五〇 其の他の消化器の疾患
 - 五一 不明の診断及不詳の原因
 - 五二 慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障害
 - 五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二級以上)
 - 五四 肋膜炎
 - 五五 自殺
 - 五六 脳出血、腦栓塞及腦血栓
 - 五七 腸チフス及パラチフス
 - 五八 其の他
- 括弧を附せるは右側の目盛に據る

- (ロ) 「肺炎」は男子と同様前年階級に比し更に著しき上昇。
- (ハ) 「腎臓炎」は男子に比し高く前年階級同様に上昇を示し昭和一三年に於て稍著しい。
- (ニ) 「其の他の消化器の疾患」は男子に比し高く、傾向は男子と異なり軽度の上昇。

(ホ) 「不明の診断及不詳の原因」は男子に比し稍高く、微弱な低下。

(ヘ) 「癌、其の他の悪性腫瘍」は明かなる低下。

(ト) 「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍」は前年階級と異なり明かなる低下。

(チ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は前階級同様明かなる上昇。

(リ) 「肋膜炎」は男子と略々同率。前年階級と同様に上昇の傾向を示し昭和一三年に於て著しい。

(ヌ) 「自殺」は男子に比して低く、前階級同様明かなる低下。

(ル) 「脳出血、脳栓塞及脳血栓」は殆んど「不変」。

(ヲ) 「腸チフス及パラチフス」は殆んど「不変」。

一三・三五—三九歳死亡率

(1) 此の年齢階級に於ても男子に比し女子死亡率が顯著に高い(第一表参照)。第二表について見るに此の間各年齢共に女子が高いが、三六歳に於て其の差が特に著しい。

(2) 前期に於ける低下は相當顯著であつて其の速度は男子を超えてゐるが、後期に於ては男子と同様に上昇の傾向を認めることが出来る。

(3) 後期に就いて之を各歳別に見るに(第二表参照)、各階級共明かに上昇を示してゐるが三九歳が稍著しと見られる。

(4) 前年階級に比し主要死因は更に分散的となつてゐる。第一位は「結核」で二一%、以下順次、「癌、其の他の悪性腫瘍」及「腎臓炎」夫夫七%、「脳出血、脳栓塞及脳血栓」及「肺炎」「其の他の消化器の疾患」夫夫五%、「不明の診断及不詳の原因」及「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜」

の「障碍」夫と四%、「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」三%、「産による出血」、「肋膜炎」、「自殺」、及「妊娠中毒(蛋白尿、子癇等)」、夫と二%である(第六〇表参照)。

男子の主要死因と比較すれば、女子に於ては「不慮の傷害」が依然主要死因中に現はれず、其の代り、比較的低位ではあるが「産による出血」

及「妊娠中毒」が現はれてゐる。「腎臓炎」は男子に比し明かに其の地位を高めてゐる(第二八表比較参照)。(5) 主要死因別死亡率を見るに(第六一表、第三四圖、第二九表及第一五圖参照)。

(イ) 「結核」は前年階級に比し更に低率で、微弱ながら低下の傾向を

第六〇表 女三五—三九歳主要死因別死亡

死 因	寛 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年		
總 數	一六、三三八	一七、三三八	一七、四四四	一八、三二五	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	二、四八四	三、三七一	三、三六二	三、四四三	15.20	19.36	19.28	18.80		
一一及一二結核	三、四一〇	三、七五七	三、八四四	三、八四三	20.80	21.61	22.01	21.45		
一一 呼吸器の結核(氣管及氣管支)	二、五七〇	二、七四七	二、八六六	二、七六六	15.64	15.52	15.63	15.08		
一一 結核(淋菌性を含む)	八四〇	九七三	九七八	一、〇五七	5.14	5.57	5.64	5.64		
一二 其の他の結核	一、三〇〇	一、三三三	一、三〇〇	一、三二四	7.84	7.53	7.61	7.08		
一八 痲、其の他の悪性腫瘍	一、二五七	一、二五二	一、一五二	一、一七三	7.69	7.19	6.56	6.45		
五九 腎 臟 炎	一、一五七	一、一五二	一、一五二	一、一五二	7.08	6.56	6.56	6.34		
三二 腦出血、腦栓塞及腦血栓	八七六	九七三	九四四	一、〇三三	5.36	5.57	5.41	5.64		
四八 肺 炎	七七一	一、一〇〇	八九三	一、一三九	4.69	6.23	5.10	6.34		
五八 其の他の消化器の疾患	七三三	七三六	七六六	八〇〇	4.48	4.20	4.48	4.37		
八五 不明の診断及不詳の原因	七三三	七三六	七九七	八八〇	4.48	4.20	4.53	4.80		
四〇 慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍	六六六	七〇〇	六六六	八一〇	4.08	4.08	4.64	4.37		
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	五五〇	五〇〇	六二二	七二二	3.37	2.94	3.53	3.91		
六七 産 による 出 血	四〇四	三九〇	四一〇	三七二	2.48	2.29	2.35	1.96		
四九 肋 膜 炎	三三三	三三三	四〇五	三三三	2.04	1.87	2.35	1.78		
七九 自 殺	三〇三	三三三	三〇〇	三三三	1.86	1.87	1.71	1.78		
六九 妊娠中毒(蛋白尿、子癇等)	二七七	三三三	三〇〇	三三三	1.66	1.87	1.71	1.78		
其 の 他	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	一、一〇七	6.78	6.34	6.34	6.13		

最近に於ける我が國死亡率率若干の傾向 (豫報) (二)

示してゐる。

(ロ) 「癌、其の他の悪性腫瘍」は男子に比し著しく高く、極めて微弱な上昇。

(ハ) 「腎臓炎」も男子に比し高く、傾向は男子同様明瞭なる上昇。

(ニ) 「脳出血、脳栓塞及脳血栓」は男子に比し稍と高く、明瞭なる上昇。

(ホ) 「肺炎」は男子同様、前年齢階級に比し更に著しき上昇。

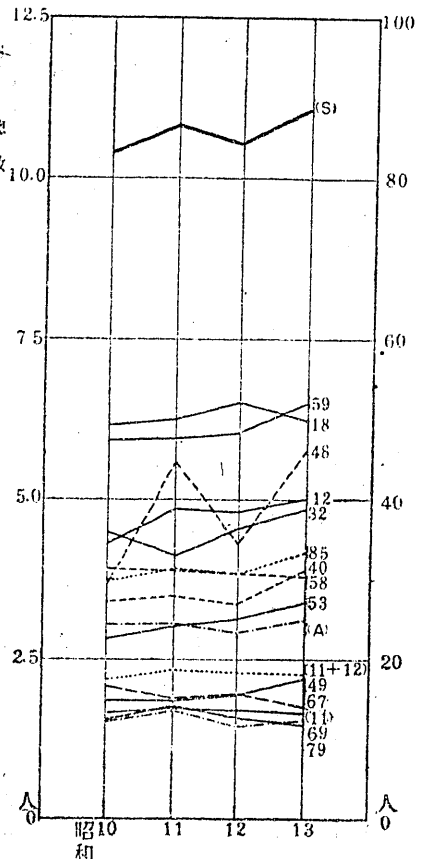
第六一表 女三五—三九歳主要死因別死亡率

(三五—三九歳女一〇,〇〇〇に付)

死	因	昭和二年	昭和三年	昭和四年
總	數	八三・七	八六・六	八八・三
主	要			
一	一及二 結核	二七・四七	二八・七二	一八・四九
一	一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の)	二二・二六	二三・八七	一三・六八
一	二 其の他の結核(淋巴腺を含む)	四・二〇	四・八四	四・八一
一	一八 癌、其の他の悪性腫瘍	六・六	六・三五	六・五二
五	九 腎臓炎	五・九三	五・九四	六・〇三
三	三 腦出血、脳栓塞及脳血栓	四・四九	四・二二	四・五五
四	八 肺炎	三・九三	五・五六	四・三〇
五	八 其の他の消化器の疾患	三・九一	三・八八	三・八五
八	五 不明の診断及不詳の原因	三・七三	三・九〇	三・八四
四	〇 慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍	三・四〇	三・四九	三・三七
五	三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	二・八二	三・〇三	三・四四
六	七 産による出血	二・〇七	一・八九	一・九八
四	九 肋膜炎	一・八六	一・八七	一・九五
七	九 自殺	一・五五	一・七七	一・五九
六	九 妊娠中毒(蛋白尿、子癇等)	一・五三	一・七一	一・五八
其	の			
他		二四・五五	二四・四五	二三・三〇
		二四・五五	二四・四五	二三・三〇

第三四圖 女三五—三九歳主要死因別死亡率の變動

(三五—三九歳女一〇,〇〇〇に付)



四〇

(ハ) 「其の他の消化器の疾患」は男子に比し高く、傾向は前年齢階級と異なり低下。

(ト) 「不明の診断及不詳の原因」は男子に比し稍と高く、傾向は前年齢階級と異なり上昇。

(チ) 「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍」は男子に比し遙かに高く、輕

度の上昇。

(リ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は前年階級同様明かなる上昇。

(ヌ) 「産による出血は」微弱な低下。

(ル) 「肋膜炎」は男子に比し稍々低く、二五—二九歳程著しくはないが上昇。

(ロ) 「自殺」は男子に比し低く、微弱な低下。

(ワ) 「妊娠中毒(蛋白尿、子癇等)」は極めて微弱な低下。

第六一表 女四〇—四九歳主要死因別死亡

死 因	實 數					割 合				
	昭和一〇年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和一〇年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年		
總 數	三九、九〇	三三、〇一	三〇、八七	三三、〇三〇	100.00	100.00	100.00	100.00		
主 要 死 因	三、三六一	三、八五五	三、九七七	三、三五六	七.41	七.86	七.13	七.33		
一 一 及 一 二 結 核	四、三三五	四、六六五	四、三九一	四、三六六	10.91	14.14	14.13	13.21		
一 一 呼 吸 器 の 結 核 (氣 管 及 氣 管 支 肺 淋 巴 腺 を 含 む)	三、一七六	三、四三三	三、三〇三	三、三五四	7.94	10.39	10.68	10.16		
一 二 其 の 他 の 結 核	一、一四七	一、二三二	一、一八八	一、〇二二	2.87	3.83	3.75	3.81		
一 八 痛、其の他の悪性腫瘍	四、二五五	四、一八七	四、一五五	三、九九六	10.66	12.51	13.46	12.01		
三 二 腦 出 血、腦 栓 塞 及 腦 血 栓	三、五五九	三、六四七	三、七〇七	四、〇三七	8.92	11.07	12.85	12.11		
五 九 腎 炎	三、二〇三	二、四〇六	二、二八九	二、四八九	8.03	7.28	7.44	7.53		
四 八 肺 炎	一、二八四	一、六九四	一、三三三	一、八三三	3.22	5.13	4.33	5.51		
四 〇 慢 性 心 臟 内 膜 炎 及 心 臟 瓣 膜 の 障 碍	一、三三五	一、四九一	一、三六五	一、五五四	3.37	4.52	4.40	4.64		
八 五 不 明 の 診 斷 及 不 詳 の 原 因	一、二六六	一、三六一	一、三〇七	一、三〇〇	3.17	4.12	4.26	4.00		
五 八 其 の 他 の 消 化 器 の 疾 患	一、二八一	一、三三九	一、三〇五	一、三二九	3.03	4.06	4.04	3.99		
五 三 下 痢、腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歳 以 上)	一、一四六	一、一九一	一、一〇六	一、四七六	2.87	3.56	3.75	4.47		
七 九 自 殺	五、六四	五、五九	五、四九	五、三三	14.13	16.94	17.78	15.55		
五 七 其 の 他 の 肝 臟 及 膽 道 の 疾 患 (膽 石 を 含 む)	五、〇一	四、六五	四、六六	五、〇一	12.56	14.09	15.11	14.92		
其 の 他	八、五五九	八、九五〇	八、九二〇	九、五五四	21.42	26.34	29.11	28.68		

最近に於ける我が國死亡率若干の傾向 (豫報) (二)

一四 四〇—四九歳死亡率

(1) 此の年齢階級から又其の死亡率は男子より低率を示し始める。前期に於ける傾向は男子と殆んど同一であり、明かなる低下が認められる。後期に於ては一上一下を辿りながらも極く軽度の上昇が認められるが、男子の上昇程の著しさはない。

(2) 後期に於て之を各歳別に見れば(第二表参照)、四四歳を除けば何れも

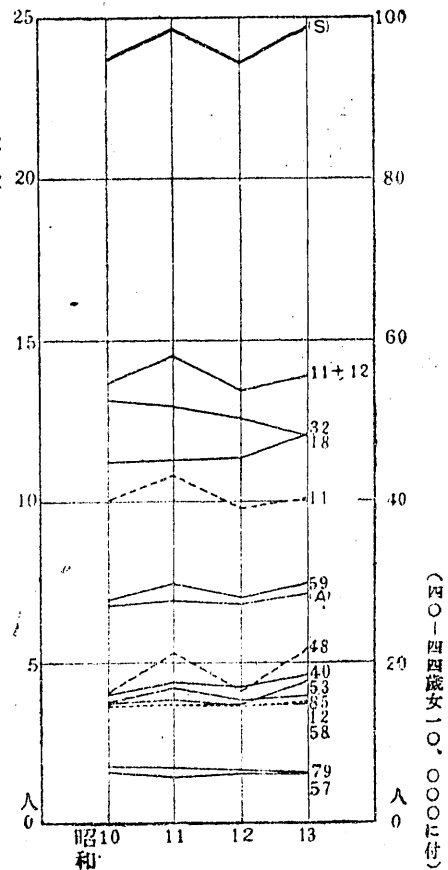
前項同様の傾向を示してゐる。尙四一歳頃より女子の死亡率は男子のそれより低くなり、其の差は年齢が高次に進むに伴れ一層顯著になつてゐる。

(3) 主要死因の第一位は男子同様依然として「結核」が占め一四%となつてゐるが前年齢階級に比しかなりの低下を示してゐる。第二位は男子に於て第三位の「癌、其の他の悪性腫瘍」で一四%、「脳出血、脳栓塞及脳血栓」は第三位になり一二%を示してゐる。

第六二表 女四〇—四九歳主要死因別死亡率

死 因	昭和			
	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年
總 數	九四・七五	九八・七七	九四・四一	九九・三三
主 要 死 因	六七・六	七〇・八三	六七・四	七〇・七四
一 一 及 二 二 結 核	一三・六	一四・五三	一三・四四	一三・九〇
一 一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の淋巴腺を含む)	一〇・六	一〇・八三	九・八〇	一〇・一一
一 二 其の他の結核	三・〇	三・六九	三・六四	三・七九
一 八 癌、其の他の悪性腫瘍	一三・六	一三・九八	一三・五九	一三・〇一
三 二 脳出血、脳栓塞及脳血栓	一一・三	一一・三〇	一一・三	一一・〇
五 九 腎 臟 炎	六・七	七・四六	七・〇一	七・四八
四 八 肺 炎	四・〇	五・二五	四・一一	五・四八
四 〇 慢性心臟内膜炎及心臟瓣膜の障碍	四・〇	四・四〇	四・三	四・六
八 五 不明の診断及不詳の原因	三・六	四・三	三・八二	三・九七
五 八 其の他の消化器の疾患	三・四	三・八四	三・六	三・三
五 三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	三・三	三・六	三・七	四・四四
七 九 自 殺	一・六	一・七	一・六	一・四
五 七 其の他の肝臟及膽道の疾患(膽石を含む)	一・五	一・四四	一・三	一・五
其の他の	二七・〇	二七・七四	二七・二七	二六・六

第三五圖 女四〇—四九歳主要死因別死亡率の變動



括弧を附せるは右側の目盛に據る

一 一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の淋巴腺を含む)
 一 二 其の他の結核
 一 八 癌、其の他の悪性腫瘍
 三 二 脳出血、脳栓塞及脳血栓
 五 九 腎臟炎
 四 八 肺炎
 四 〇 慢性心臟内膜炎及心臟瓣膜の障碍
 八 五 不明の診断及不詳の原因
 五 八 其の他の消化器の疾患
 五 三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)
 七 九 自殺
 五 七 其の他の肝臟及膽道の疾患(膽石を含む)
 A 其の他の

(4) 主要死因別死亡率を見るに(第六二表、第三五圖、第三一表、第一六圖「腎臟炎」は第四位に下り七%、以下「肺炎」、「慢性心臟内膜炎及心臟瓣膜の障碍」、「不明の診断及不詳の原因」、「其の他の消化器の疾患」、「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」が各々四%を示してゐる(第六一表参照)。男子に比較し特に差異の認められるのは、男子に於て七%を占めてゐた「不慮の傷害」が女子に於ては殆んど認められないことである。

參照)

- (イ) 「結核」は男子に比して著しく低く、傾向としては軽度の上昇。
- (ロ) 「癌、其の他の悪性腫瘍」は男子より遙に高く、前年齢階級とは逆に傾向は著しき低下を示し、男子の低下に比し一層顯著である。
- (ハ) 「脳出血、脳栓塞及脳血栓」は男子に比し著しく低く、傾向は男子同様明かな上昇、特に昭和一三年に於て一層顯著。
- (ニ) 「腎臓炎」は男子に比し常に高く、傾向は男子同様軽度の上昇。
- (ホ) 「肺炎」は男子に比し常に低く、傾向は男子同様一上一下はあるが明かな上昇。
- (ヘ) 「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍」は男子より高く、傾向は軽度の上昇。
- (ト) 「不明の診断及不詳の原因」は男子より常に低く、傾向は男子同様「不變」。
- (チ) 「其の他の消化器の疾患」は昭和一〇年より同一二年迄は男子が幾分高率であるが、昭和一三年には僅かであるが男子を凌いでゐる。傾向は男子同様微弱なる低下。
- (リ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子の主要死因中に含まれないが、女子に於ては第九位を占め、昭和一〇年より同一二年迄は「不變」であるが、昭和一三年には明かな上昇を示してゐる。
- (ヌ) 「自殺」は男子より低く、傾向は男子同様に低下。
- (ル) 此の年齢階級に於て初めて主要死因中に見られる「其の他の肝臓及膽道の疾患(膽石を含む)」は「不變」。

最近に於ける我が國死亡率若干の傾向 (豫報) (二)

一五 五〇—五九歳死亡率

- (1) 此の階級に於ても女子の死亡率は男子に比して著しく低く、其の差は四〇—四九歳の場合より一層甚だしくなつてゐる。傾向は男子と全く同一で、前期に於て「不變」、後期に於て上昇、特に昭和一三年に於て著し。
- (2) 後期に就いて之を各歳別に見れば(第二表參照)、五〇歳のみを除いて何れも前項同様の傾向を示し、五九歳を除けば何れも年齢の上昇と共に死亡率が高くなつてゐることが男子の場合と同様に認められる。又各歳別死亡率に於ける男女の差は年齢の上昇と共に大となつてゐる。
- (3) 主要死因中、五—九歳階級以上に於て第一位を占めてゐた「結核」が第四位となり七%を示してゐる。第一位は男子と同様に「脳出血、脳栓塞及脳血栓」で、二一%を示してゐる。第二位も男子同様に「癌、其の他の悪性腫瘍」が占め一五%、「腎臓炎」が第三位に上昇して八%、以下「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」が六%、「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍」が五%、「肺炎」及「不明の診断及不詳の原因」が各四%等である(第六三表參照)。尚「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子に於ては第一〇位にあつたものが女子に於ては第五位に上昇してゐるのは注目に値しやう。
- (4) 主要死因別死亡率を見るに(第六四表、第三六圖、第三三表及第一七圖參照)、
 - (イ) 「脳出血、脳栓塞及脳血栓」は男子に比して著しく低く、傾向は男子同様に明かなる上昇。

第六三表 女五〇—五九歳主要死因別死亡

死因	實數					割合
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一四年	
總數	四三、九六四	四四、二四〇	四二、九六六	四六、〇五七	一〇〇・〇〇	一〇〇・〇〇
主 要 死 因	三、三三九	三、〇五八	三、三二六	三、四八七	七・五九	七・五九
一 腦出血、腦栓塞及腦血栓	九、〇五五	九、〇〇〇	九、八八一	九、六四七	二〇・七	二〇・四
二 瘧、其の他の悪性腫瘍	六、五九九	六、三五六	六、六六六	六、六六〇	一五・〇	一四・七
三 腎 臟 炎	三、五三三	三、四六四	三、三九九	三、六四五	八・〇	七・八
四 一 及 二 結 核	三、〇七三	三、三五六	三、三〇三	三、一五二	七・〇	七・五
五 一 呼 吸 器 的 結 核 (淋 巴 腺 及 氣 管 支 的)	二、二六二	二、四七二	二、二九一	二、二七一	五・二	五・三
六 一 二 其 他 の 結 核	七、六六	八、八六	八、〇一	八、八〇	一七・六	一八・七
七 三 下 痢、腸 炎 及 腸 潰 瘍 (二 歳 以 上)	二、四二〇	二、四三三	二、四四七	二、八三六	五・五	五・六
八 四 〇 慢 性 心 臟 内 膜 炎 及 心 臟 瓣 膜 の 障 碍	二、〇一一	二、〇六二	一、九〇五	二、一三六	四・六	四・六
九 四 八 肺 炎	二、六五九	二、一三〇	一、七九九	二、二九九	三・六	四・〇
一〇 八 五 不 明 の 診 断 及 不 詳 の 原 因	一、六〇〇	一、七九	一、四四五	一、六七九	三・七	三・九
一 一 五 八 其 他 の 消 化 器 の 疾 患	一、四三六	一、四三六	一、三六三	一、四六六	三・三	三・三
其 の 他	二、二五五	三、一九七	二、七五九	三、一五七	七・七	七・七

(ロ) 「瘧、其の他の悪性腫瘍」も男子より低く、傾向は男子に於て「不變」であるが、女子では前年階級とは逆に軽度の上昇。
 (ハ) 「腎臓炎」も男子より低く、傾向は男子に於て「不變」であるが、女子では微弱なる上昇。
 (ニ) 「結核」に於ては女子は男子より著しく低く、傾向は男子同様殆んど「不變」。
 (ホ) 「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子より僅かに高く、傾向は男子と同様程度の微弱なる上昇。

(ヘ) 「慢性心臓内膜炎及心臓瓣膜の障碍」は男子と大體に等しい死亡率を示し、男子と同様微弱なる上昇傾向を示す。
 (ト) 「肺炎」は男子より著しく低く、一上二下を辿りつゝも、男子同様に明かなる上昇。
 (チ) 「不明の診断及不詳の原因」は男子より低く、傾向は男子同様「不變」。
 (リ) 「其の他の消化器の疾患」も男子より僅かに低く、傾向は男子同様「不變」。

第六四表 女五〇—五九歳主要死因別死亡率

(五〇—五九歳女一〇,〇〇〇に付)

死 因	昭和二年	昭和三年	昭和四年
總 數	二五・二	二六・八	二六・八
主 要 死 因			
三二 腦出血、腦栓塞及腦血栓	三・九	三・六	三・七
一八 癩、其の他の悪性腫瘍	三・〇	三・四	三・五
五九 腎 臟 炎	三・八	三・五	三・五
一一及一二 結 核	二・〇	二・五	二・五
一一 呼吸器の結核(氣管及氣管支の)	八・三	九・〇	八・三
一二 其の他の結核	二・七	三・六	二・九
五三 下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	八・八	九・〇	一〇・〇
四〇 慢性心臟内膜炎及心臓瓣膜の障礙	七・三	七・三	七・八
四八 肺 炎	六・四	七・八	八・三
八五 不明の診断及不詳の原因	五・九	六・三	六・二
五八 其の他の消化器の疾患	五・三	五・九	五・六
其の他の	四・三	四・九	四・九

一六 六〇歳以上死亡率

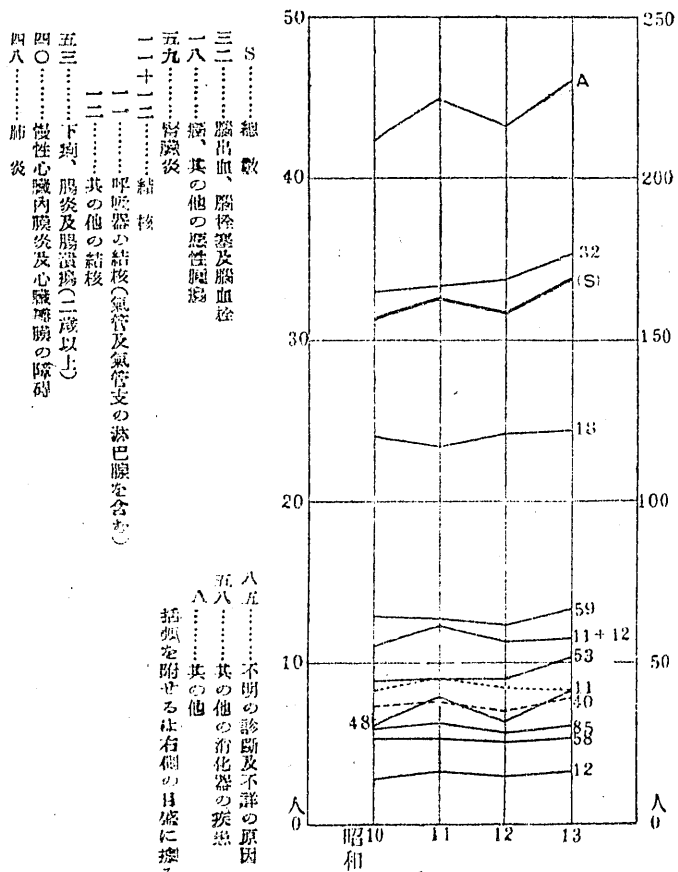
(1) 此の階級の死亡率に於ても女子は男子に比し著しく低く、其の差は從來のものを遙かに凌ぎ最も顯著である。傾向は男子と殆んど同様である。即ち前期に於ては低下を、後期に於て上昇を示し、特に昭和一三年に於て著しい上昇が認められる。

(2) 後期に於て之を各歳別に見れば(第二表参照)、六四歳及七〇歳を除けば何れも前項同様の傾向を示してゐる。尙男子と同様に年齢の上昇に伴つて死亡率も高くなつてをり、死亡率の男女差は大體七〇歳位迄は年齢

最近に於ける我が國死亡率若干の傾向 (豫報) (二)

第三六圖 女五〇—五九歳主要死因別死亡率の變動

(五〇—五九歳女一〇,〇〇〇に付)



の上昇と共に大となつてゐるが、それ以上の年齢に於ては規則正しい差の増大は認められない。

(3) 此の年齢階級に至つて死因は再び集中的になり、男子以上の集中度を示してゐる。第一位は男子で第二位となつてゐる「老衰」が占め二八%、第二位は男子に於て第一位の「腦出血、腦栓塞及腦血栓」で二二%を示し、第三位は男子同様「腎臓炎」で八%、第四位も男子と同じく「癩、其の他の悪性腫瘍」で七%、第五位が男子に於て第六位であつた「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」が占め六%となつてゐる(第六五表参照)。

第六五表 女六〇歳以上主要死因別死亡

死因	實數				割合			
	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年	昭和一〇年	昭和一一年	昭和一二年	昭和一三年
總數	二七,三三三	二八,一八八	二六,三三三	二九,四三三	100.00	100.00	100.00	100.00
主要死因	一九,一七三	一九,七三九	二六,七三三	一九,八七七	70.0%	70.0%	71.2%	67.3%
老衰	四七,一三二	四九,七四二	五〇,四七九	五八,六三五	174.0%	176.5%	192.3%	200.0%
腦出血、腦栓塞及腦血栓	三七,一〇三	三八,三七七	三八,七三四	四一,三三三	136.0%	138.7%	146.3%	152.0%
腎臟炎	一四,一八五	一四,九六一	一四,三三二	一五,八一一	51.9%	53.0%	54.1%	57.1%
癌、其の他の悪性腫瘍	一一,〇八八	一一,三三三	一一,四三三	一一,七一一	40.6%	40.2%	43.4%	40.1%
下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	九,五九三	一〇,五三三	一〇,九三五	一一,五三三	35.1%	37.4%	41.6%	39.5%
其他	四八,一九三	五五,四九三	四九,五三四	五七,六七七	178.1%	200.0%	180.0%	196.0%

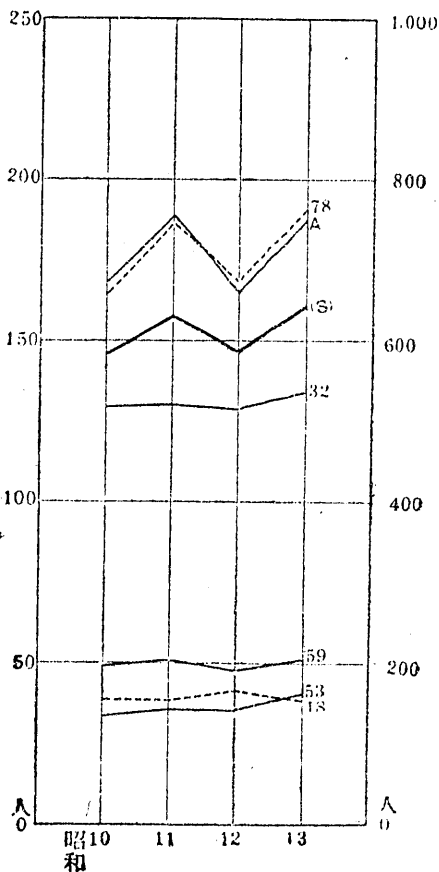
第六六表 女六〇歳以上主要死因別死亡率

死因	率(六〇歳以上女一〇,〇〇〇に付)			
	昭和〇年	昭和二年	昭和三年	昭和三年
總數	五四〇・元	五〇〇・三	五八六・九	六四三・七
主要死因	四二六・四	四四一・五	四三三・〇	四五五・九
老衰	一六四・七五	一六八・三	一九一・九	二一九・二
腦出血、腦栓塞及腦血栓	一三〇・五	一三〇・〇	一三〇・〇	一四〇・八
腎臟炎	四九・五三	五〇・九	四七・七	五一・五
癌、其の他の悪性腫瘍	三六・七	三八・三	四一・五	三八・八
下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)	三三・九	三五・九	三五・三	四〇・八
其他	一六八・二	一八八・七	一六四・九	一七八・七

(4) 主要死因別死亡率を見るに(第六六表、第三七圖、第三五表、第一八圖参照)

(イ)「老衰」は男子より著しく高いが、傾向は男子と同様一上一下を辿りつゝも明かなる上昇。六〇歳以上總數死亡率の上昇は男子同様老衰の上昇に據るものと言ひ得やう。

第三七圖 女六〇歳以上主要死因別死亡率の變動



七八.....總數
 三三.....老衰
 五九.....腦出血、腦栓塞及腦血栓
 一八.....腎臟炎
 五三.....癌、其の他の悪性腫瘍
 A.....下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)
 括弧を附せるは右側の目盛に據る

(ロ)「腦出血、腦栓塞及腦血栓」は男子より遙かに低く、傾向は男子の低下に反し、女子に於ては微弱なる上昇。

(ハ)「腎臓炎」は男子より僅かに低く、男子の軽度の上昇に對し、女子は「不變」。

(ニ)「瘡、其の他の悪性腫瘍」は男子より低く、傾向は男子同様殆んど「不變」。

(ホ)「下痢、腸炎及腸潰瘍(二歳以上)」は男子より僅かに高く、傾向は男子同様軽度の上昇。

ツァーン 著「家族及び家族政策」

Friedrich Zahn, "Familie und Familienpolitik",

1918, Berlin.

島 村 俊 彦

序文によると、本書は一九一八年七月二日ルーデンドルフ寄附金ミニオン(ヘン)委員会の懇望に基づき、著者ツァーンが行つた公開講演に若干の事項と文獻を註として補足し印刷に付したとある。全文僅々四十頁の小冊子に過ぎない。本書は公開講演の性質上、當然専門的な特殊研究といふよりは、人口政策の樞機たる家族及び家族政策を廣い觀點から取扱つた最も包括的なものといふことが出来る。しかし語られてゐるところは、深い觀察と理解を最も凝縮した形に於て表現せられ、我々に對し率直に問題の所在を示し、以て我々の研究に示唆を與へるといふ意味に於て、教へらるゝところ

が尠くない。本書に於て提唱或は推奨されてゐる家族政策の中には、我國に於て今日已に實施されてゐるものもあるが、今後現實の問題として考慮すべきものも少くないかと思はれる。勿論我國と獨逸とは、國家及び家族の成立竝に歴史を異にし、従つて政策が其上に立つところの根本思想をも全くは同じくしないであらう。しかし彼等から攝取すべき滋味の尠くないことも亦確かである。

我國最近に於ける國家情勢の發展に際し、我々は此舊著を再び新なる目を以て見直すことに格別の意義を感じるのである。比較的舊著であるに拘らず敢へて大意の譯出を試みた所以である。

一、國家及び民族に對する家族の意義

一夫一婦制を基礎とする家族の意義は極めて大きく、これを如何に高く評價するとも評價し過ぎるといふことはない。家族は個人に對してと同じく、民族及び國家に對しても其の搖籃である。それは肉體的、精神的、道德的及び民族的な力の青春の泉である。キリスト教文明國家に於ては、家族は今日二重の、密接に結合つた關係即ち一方では夫と妻との關係、他方では父、母及び子供との關係として見る事が出来る。夫婦共同體は生活と愛とを共にするところの子供に生命を與へなくてはならぬ。かくて家族は肉體的生活及び種族繁殖の直接的源泉となるのみならず亦同時に國家の原細胞、胚細胞であり、民族體の不斷の更新及び進歩的改良への眞の手段となる。

死亡し行く國民を補充するために國家が必要とする人間は家族の中に於て繰返し々々作られる。家族は又國家の必要とする人間資質を創造する。